

# 善光寺の江戸開帳について

鷹 司 誓 玉

## 一、出開帳

a、「御開帳」のおこり

d、回國開帳と三都開帳

## 二、江戸開帳の概観

a、起源

b、経過

c、人員

d、収支

## e、眞田家との關係

## 三、開帳記録より見た善光寺の組織

a、近世の寺院機構

b、本坊兩寺の關係

c、講中

## 四、善光寺信仰の普及

むすび

は し が き

信州善光寺は慶長六年家康により千石の寺領を與えられて以後幕末に至るまで、經濟基盤は歴代將軍家の保證を得て一應安定していた。しかし特定の檀家をもたないので寺領<sup>(註1)</sup>以外の収入は一般參詣者の志納奉養をまつのみで、不時の出費即ち火災震災などで被害をうけ伽藍修覆の必要が生じた場合等には別途の収益方法を講じなければならなかった。ここにおいて行われたのが「御開帳」である。

大體諸寺の佛菩薩の尊像は篤信されるに従つて奥深く秘藏される傾向がある。然して反面から言えば平等容易に解せないとなると、稀れに拝觀を許された特別の機會は一層人々の信心を誘發し、その像の尊嚴性神秘性を増加せしめて行くのである。江戸時代中期以降は江戸をはじめ各地で諸寺の尊像が盛んに開帳され、中でも善光寺の一光三尊如來、嵯峨清涼寺の釋迦像、成田の不動尊などの出開帳は著名である。それは今のべた如く衆人の信心を喚起せしめると共に奉賽寄進等で寺院の収入増加をはかる一法でもあつた。

善光寺の開帳は大別すると金堂開帳・出開帳の二種があり、更に出開帳は回國開帳と三都（江戸・都・大坂）開帳とに分けられる。

これらに關して纏まつた資料は餘り多くないが本坊大本願には延享二年から明治四年に至るまで百二十五年間（うち二十三年間分は不足）の「大奥御用日記」をはじめ、安永七年及び文政三年の江戸開帳日記その他がある。又代々大勸進の寺侍をつとめた今井家には享和二・三年、文政二年の開帳用記計八冊をはじめ斷片的ではあるが各種の關係文書が傳持されて居り、昨年長野縣立圖書館に寄贈され閱覽の便が計られるようになった。

江戸開帳は後に詳述する如く元祿五年以後六回行われたが右の資料は大體後期のもののみで、前半三回の記録は寶歷元年正月の火災で善光寺方丈坊舎が焼失し、同十年四月には大門町出火があり町の舊家等多數罹災したためか殆んど残っていない。しかし先例故實を重視した時代の事としてこれらの用記には各事項ごとに一々先例が記録されて居り、我々は元祿五年以來の江戸開帳の實情を相當克明に知る事が出来る。故に今回は主として左記の記録類を用い、あわせて近世諸文献の記事をも參照しながら善光寺江戸開帳の實態を知り、三都及び回國開帳の果たした役割について考察したいと思う。

なおりポート中左の記録を用いるがその抄出に当つては便宜上「」の略記を以て題名にかえる。

## 大本願藏

○大奥御用日記（延享二年〜明治四年まであり、今回は安永七、享和三年等を用いる）〔奥日記〕

○如來三都御廻國御開帳日記 〔如來三都廻國〕

○安永七戊午江戸御開帳日記 〔安永七奥〕

○文政三庚辰年如來江戸御開帳御用日記 上・中・下 〔文政三奥〕

## 長野縣立圖書館藏（今井家舊藏）

享和  
江戸開帳用記一・二・三・四 〔享和今井用記〕

○享和二壬午江戸開帳御双用記上・下 〔享和二御願〕

○文政江戸御開帳用記 乾・坤 〔文政今井用記〕

○善光寺如來并靈寶等御城江奉入候様被仰出候先例覺 〔御城入先例〕

○江戸御開帳ニ付眞田家御審所並御預ケ金等之儀掛合一件 〔御預ケ金掛合〕

○善光寺如來御當地開帳後淺草燈明寺並上野山内江引移逗留仕候先例覺 〔開帳後先例〕

## 岸本家藏

○安永七戊戌歲（以下表紙破損にて） 〔安永七岸本〕

なお大正十一年善光寺史研究會刊行の「善光寺史研究」にも大本願藏古記録類が相當量収録されて居る故〔寺史研究〕として引用した。

## 一、出 開 帳

a、「御開帳」のおこり

本來開帳というのは戸帳をひらいて秘藏する佛菩薩の像を拝瞻せしめる開扉・啓龜の意であつて、中國において唐の憲宗元和十三年に鳳翔法門寺護國眞身塔内釋迦牟尼佛の指骨の一節を開き歲豊人安を祈る事を奏し、翌年勅によつて開帳<sup>(2)</sup>されたのが最初である。

我が國でも中古から行われ「明月記」の嘉禎元(一二三五)年閏六月十九日の條に善光寺佛を寫した三尊佛を京中の道俗がきそつて禮拜したと云う事があり

閏六月十九日庚戌・終夜雨降朝天陰・禪尼數輩<sup>(所カ)</sup>乘車禮・近日可聞三尊像・近日京中道俗騷動禮拜云々・奉寫善光寺佛云々

また「實隆公記」永正五(一五〇八)年五月十一日の善光寺新佛觀覽の事・「二水記」永正十四年四月十一日法輪院虛空藏開帳の事などが古い例である。實隆公記三十八卷には文明九年六月二十四日善光寺本堂の火災で佛體を燒失したので七日後戒順の發願により堺北庄で勸進造立し、文龜二年卯月八日完成し信州へ下向するに當つて、その途次大和橘寺・南都を経て叡山坂本に逗留して、禁裡えも奉持し觀覽に供えた時の情況が詳しく記されている。

永正五年五月十一日戊申 又善光寺新佛觀覽事、頻望<sup>ニ</sup>申之<sup>一</sup>可<sup>レ</sup>爲<sup>ニ</sup>如何<sup>一</sup>哉之由被<sup>レ</sup>仰之旨趣先目安依<sup>レ</sup>寫留<sup>レ</sup>之

信州沙門戒順謹言上

右根本善光寺前立新佛者弘聖菩薩依<sup>ニ</sup>如來靈告<sup>一</sup>被<sup>レ</sup>造<sup>ニ</sup>立之<sup>一</sup>(中略) 欽明天皇御宇善光寺如來奉<sup>レ</sup>入<sup>ニ</sup>禁中<sup>一</sup>有<sup>ニ</sup>御

敕覧ニ云々 任ニ往古例ニ御敕覧候之條願ニ啓達ニ者可ニ畏入存ニ之旨謹言上如レ件

なお右の文中には「往古の例に任せて御敕覧候」とあるので欽明天皇御宇というのは肯定出来ないが何らかの前例がすでにあつたのではなからうかと思われる。

近世光善寺の開帳を見ると序文においてもふれた如く信州善光寺の本堂において一定の期間に限つて行われる金堂開帳と、他所え出張して行われる出開帳とがあるがいづれの場合も「前立本尊」即ち本佛に對する第二義的な佛像を開帳するのである。この像は「開帳佛」とか「お前立さん」といわれる。傳説によると三國傳來の光三尊阿彌陀如來が孝德天皇の御宇勅封となつたので、本田善光が本尊の眞容を模して造立せられたものであると傳えられて居り、明治三十九年國寶に指定された。善光寺開帳の特色は本尊をあくまで秘佛として公開せず、たまゝの別事法要においても他寺のそれが本佛を拝せしめるのに比して、當寺ではお前立さんを拝せしめるのみであつた事である。更にその期間中に繪縁起講談・御印文頂戴の儀などを併せ行つて本尊の神秘性を強調する如き一種の演出がなされていた點も注意すべきであらう。

金堂開帳は元來三萬五千日回向とか四萬五千日回向など稱し、一定期間の不斷念佛滿行を記念して行われたものらしく、近世では各出開帳成滿後にしばゝ「御回向念佛」として行われている。善光寺本堂内で前立本尊を開帳するもので、その最初に行われた年代は未詳であるが一遍上人繪詞傳七（清淨光寺本）に見る次の記事も金堂開帳の事と思われる

かくて善光寺に詣給たれば、式日の外はまれにもつとめられさる舍利會臨時におこなわれて御戸開れたり、是併如來の教直方便にてこそましますらめとて寺家より日中の行法は禮堂にて有べきよし申うけられければ云々

(文永八年)

しかし諸般の形式をととのえて行われるようになったのは〔奥日記（延享二ノ寶歴二）〕によれば延享二年三月十五日から四月十五日まで本堂修覆のために行われたというのが最も早いようである。その後も時折り行われたが、ことに江戸時代後期以後は七年目ごとに行われて居り、はじめは「御回向」と稱していたが後期以降は一般に「御開帳」と稱し、現在まで繼續している。<sup>(表1)</sup>

表I 開帳執行年表

AD	年 月 日	開 帳	備 考
一六四二	寛永一九・五・九		善光寺焼失
六六	寛文六		同 再興
八五	貞享二・四		妻戸五坊（時宗）天台宗大勧進支配となる
八六	三・六		中衆十五坊（浄土宗）同
九二	元禄五・六・五	江戸開帳	於本所回向院
九四	七・六・二四	京開帳	於眞如堂
九七	九・一四	大阪開帳	於天王寺
一七〇〇	一〇・二・二七		善光寺再建始ル
〇一	一三・七・二一	江戸開帳	同 出火にて用材等焼失
〇二	一四・三・一〇	回國開帳はじまる	於谷中感應寺
〇三	一五・九・		上總方面勸化
〇五	寶永二・二・一五	京開帳	江戸保福寺で越年
〇六	九・一五	大坂開帳	於八坂庚申堂
	三・一五	回國開帳終る	善光寺再建始る
	三・八		於天鷲寺

〇七	〃	四・	八・一三	〃	終る	善光寺如來堂完成、入佛
一七	正徳	四・	三・一五	〃	終る	同 堂門等地震で小破
三一	享保	六・	一	〃	終る	江戸開帳許されたが都合で延期
四〇	元文	五・	二	〃	終る	大本願・日光門主支配となる
四一	寛保	一・	六・一	〃	終る	於本所回向院
四六	延享	三・	三・一五	〃	終る	於大佛殿
四七	寛延	四・	三・一三	〃	終る	於天王寺
四八	安永	一・	九・二八	〃	終る	於信州善光寺本堂
七三	〃	二・	三・二五	〃	終る	越後・奥羽・常陸・下總・關東
七八	〃	七・	六・一	〃	終る	(江戸で越年) 甲州方面を経て歸座
八〇	〃	九・	四・一	〃	終る	於回向院
八二	天明	二・	七・一九	〃	終る	於盧山寺
八九	寛政	一・	三・一〇	〃	終る	於天王寺
九一	〃	三・	三・一〇	〃	終る	泉和・畿内・東海道・江戸にて越年。翌年は
九四	〃	六・	八・三〇	〃	終る	關東奥州越後方面・越後にて大勸進慈薰病歿
九五	〃	七・	一	〃	終る	のため如來歸座回國の儀中途乍ら願下げる
九六	〃	八・	一	〃	終る	諸堂修理完成の回向
九七	〃	九・	一	〃	終る	前回につゞきとして北陸地方よりはじめる
九八	〃	一	九・六・二二	〃	終る	京・桃山龍雲寺で越年及び新年開帳す
				〃	終る	同右 (この間に中國・四國・九州方面を
				〃	終る	回國) 大阪・深江・法妙寺で越年及び新年開
				〃	終る	帳・歸座

九	一〇・三・一	四・三〇	金堂開帳	於淺草傳法院 於回向院 回國開帳許されたが諸國飢饉のため無期延期 大地震・火災のため中絶
一八〇	三・六・一	八・二一	江戸開帳	
三	四・三・一〇	四・二九	金堂開帳	
四	八・二・二五	四・一五	金堂開帳	
一一	文政 三・六・一	八・二〇	江戸開帳	
一九	文政 三・六・一	八・二〇	金堂開帳	
二一	天保 三・三・一	四・二〇	金堂開帳	
三三	天保 三・三・一	四・二〇	金堂開帳	
三五	六・四	四・二〇	金堂開帳	
四〇	弘化 一・三・一	四・二〇	金堂開帳	
四七	弘化 四・三・一〇	三・二四	金堂開帳	於回向院 回國開帳許されたが諸國飢饉のため無期延期 大地震・火災のため中絶
六四	元治 一・二・七	三・八	金堂開帳	

## b、回國開帳と三都開帳

善光寺は北信のいわゆる善光寺平と稱する盆地にある。江戸からの旅には碓氷峠をこえ上田を通つて善光寺平に入る中仙道（追分まで）、追分から善光寺を通つて越後出雲崎に至る所の北國街道があり・京阪地方からは東海道を上り關ヶ原・上ヶ松・松本・鹽尻を経由して來る善光寺道（北國西街道とも言ふ）があつた。しかし交通機關の不備な時代においてはいかに三國傳來の靈佛と雖も山間の險路をこえてはる／＼信州の本寺へ參詣する信徒の數はごく限られたものであつたらう。

江戸中期以降しばしば行われた出開帳は他所に出帳して多くの人々に秘佛を拝させる事により遠隔の地方との因縁を結び、伽藍維持の募財の役割をはたす爲の重要な行事であつた。その結果は時によつて諸種の條件に禍いされて必らずしも所期の収益を上げ得ない場合もあつたが、善光寺の存在そのものを全國的に認識させたのであり、殊



に大がかりに行われた三都開帳は階層の上下をとわず多數人士をして善光寺信仰に導入する積極的な宣伝効果があったと言えると思う。

回國開帳は場所や時間を制限せず廣範圍に各地を遊行勸募したもので、信濃一國に限つては寛文元（一六六六）年に許されたのが最も早い。全國各地を行脚し、民衆との結縁を目的として眞に回國したのは元祿十四年九月から寶永三年八月までの約六ヶ年間行われたのが最初である。爾來幕末までに延享四〇五年、安永九〇天明二年、安政六〇十年の計四回十六ヶ年にわたつて行われて居り「巡國開帳」とも稱する。各種開帳の中でこの回國開帳は善光寺信仰普及という點で最も寄與する所大であり、少人數で諸國を行脚結縁する事あたかも中世以來の「念佛をすすむる聖」の傳統を繼承しているかの感がある。尤も回國が何年間かの長期に涉る場合には三都のうちのいづれかでの開帳をも交じえ行われた例もあり、それについては後に詳述する。

三都開帳とは江戸・京・大坂において行われる開帳の事であつて淨土宗大本願を本坊とする中衆十五坊と、天台宗大勸進を本坊とする衆徒二十五院、及び時宗の妻戸五坊のいわゆる「三寺中」が一體となつて行ふものである。その三都では元祿五年六月五日〇八月五日の江戸開帳・元祿七年六月二十四日〇八月三十日京開帳・同九月十四日〇十一月十日大坂開帳の行われたのがそれ〇〇の最初であり、爾後幕末までに江戸六回・京大阪では四回出開帳されている。これらのうち元祿度の開帳についての直接資料は当寺には僅少であるが「徳川実記卷四十三・四十四」に元祿十四年江戸開帳のことが見え、「堯恕法親王記卷三十二」には元祿七年京都開帳終了後九月六日に如來を青蓮院門跡に招請した時の詳細が記されている。

なお先にも少しふれた如く回國開帳が長期に涉る場合は三都のうちいづれかもよりの所がその基点となつてゐる。

例えば越年に當つては関東から奥羽地方へかけての巡國の場合であれば江戸へ、近畿中國以西方面の回國中であれば京又は大坂に宿寺を定め、勸化の同勢は一応その宿寺に引上げて新年を迎える。然して信州本寺では往古からの堂童子と稱する傳統的な越年行事があつて御印文を必要とするので、そのみ急遽提行して正月法儀をつとめ、終了後直ちに宿寺に戻つて一行と合流して巡國を再開するのが常であり、年初の一期間その宿寺において開帳してから回國繼續に立出した例もある。故に三都開帳の實際回数<sup>(5)</sup>は第一表にも示した通り今少し多いのである。

〔如來三都廻國〕によつて出開帳の意圖を見ると元禄五年度の願書には次の如くある。

(前略) 然所從往古數度致炎燒候故ニ再興漸々減少仕本堂も假堂故大破殊ニ寶塔樓門も只今ハ礎石耳相殘候間今度於御當地並京大坂繪縁起講談仕存寄之奉加御座候ハバ本堂修覆仕塔樓門等再興仕度奉存候、御赦免被遊爲仰付被下候様ニ奉願候 以上

元禄五年四月九日

善光寺 大本願誓傳上人判

大勸進本孝法印判

本多紀伊守殿

寺社奉行所 戸田能登守殿

松浦臺岐守殿

かように再建資金の勸募を目的としたものではあるが善光寺の出開帳はあくまでも諸人との結縁を重視し、庶民の負擔にならぬ範圍内においての合力を求めるようにつとめている。そのことは同じく大本願藏の「勸進帳」の序文<sup>(6)</sup>

によつても明瞭に知り得るのである。

(前略) あまたたび回祿せし時には舍利炭片にあらわれ無縁の衆生をしてゑんをむすばしめ建立の折からは良材飛柱踊躍の奇をしめし不信の人倫其信仰のまことをおこさしめ給ふならん、其後本堂のみかりに起立すと雖も柱椽摧朽し梁棟傾斜せん此時にあたりて予いやしくも一品親王の嚴命をかうふり如來禮奠の給仕をつとめ往昔美麗の舊記を見當寺衰滅のありさまを見て悲歎の袂かはくひまなし、故に今度本堂並に寶塔樓門再興の大願を發し本願善尼並三山の僧侶と評せしに皆義を見ていさむ心あり(中略) 十方檀那の助力をたのみ造營の周備を没後にねがふのみなり、乞願は信心の男女善光寺建立講をくはたて一日に一錢を投じて五年の間たくはへ其年々のおはり毎に講頭信州へ送り届け大願を成就せしめ給へ、若し然らば講中の俗名戒名過現の名帳に載せ如來前に於て現世安穩後世清淨土の回向永く怠慢不可有者也 仍如件

元祿五壬申才五月十八日

大本願誓傳上人

三寺中惣代 玉照院 昌榮

大勸進本孝 印

この奉加帳では一人一日一錢・即ち一ヶ年三百六十文を五ヶ年つみ立てる事を勧め、約三万兩の募金を得るのを目的としていた。

ひとつぐちに出開帳と言つても三都開帳と回國開帳との間には目標・運営その他いろいろな面で相異があるので一応考察を加えておこうと思う。それについては〔享和二御願・上〕に明瞭な規定がある。

日本回國の儀は結縁のみの事にて往古よりの仕來に御座候、御當地並京大坂にて開帳奉願候儀は修覆難及自力に節御願仕候仕來りにて譯合違候事に御座候 云々

古來より開帳願之節は大勸進・大本願と認來り候間古例之通此度も相認申候尤回國開帳願等大勸進一判に而御願申上候節は右被仰聞候通 云々  
(享和二・五・一三)

三都開帳の願書には大本願大勸進の連署連判が必要であるが、回國開帳はすべて大勸進別當の責任において行われるので願書も單獨で提出する。又開帳中の金銭出納も三都の場合は三寺中の共同運営であるから大本願側役人も立ち合っているが、回國は結縁を第一目的としているので多少の収益があつてもそれは善光寺のものとせず巡錫・收入管理その他一切大勸進のみで行い、祠堂金等として大勸進一ヶ寺の經營に當てたようである。

寛政度の回國開帳中に大勸進が京桃山の龍雲寺・大阪深江の法妙寺において單獨で開帳を行い、大本願に何の申し入れもなかつたので「巡國序に而は乍候御立合の場所に御座候・此段承知致度候」と大本願側から寛政九年十二月より翌十年五月にかけて再三詰問した時には大勸進は、これは本當の京大坂開帳ではなく回國開帳中隔年に京大坂で越年しそれらの場で開帳するだけの事であるから御立合ひには及ばないと思つた、など言いわけをして今後はあいさつすると約しようやく事態を落着させている事があるのを見ても容易に性格の相異が知られる。

人員については後に詳述するが概觀すれば三都開帳には約三百人前後の供奉があつたに對し、回國開帳は大勸進別當及び衆徒數人を中心とするごく少人數の一行が前立本尊を背負い縁にまかせて諸國を勸進行脚したのである。なおその他にも兩者の相異を證明する記事は隨處に見出せる。

例えば「享和二御願」によると、前回安永度の江戸開帳の收入により一応本堂その他の修理を行い、その後も懈

怠なく修理を加えて來たが床下など破損しその他朽損箇所も多く「修復之儀難及自力」なつたので明年淺草寺で開帳致したい趣きを願書に認め、江戸開帳先例書及び靈佛（寶物）などの覺え書をそえて寺社奉行所に提出している。これに對し奉行所から、先例書の中に江戸開帳の先例ばかりでなく近年迄に行つた「日本回國開帳」の先例をも加えて差出すよう要求せられたが、次の如き文書を提出して兩者の相異を主張している。

御當地に而開帳之節先例御尋之節古來御當地之先例を書上、京都に而は京都之先例書上仕大坂も同様之事に御座候、此度回國之先例書加候はば京大坂開帳之先例も書加可申哉 殊に日本結縁巡行之儀は爲修復開帳願上候とは譯合違候 云々（享和二・五・一五）

日本回國之儀ハ結縁而己之事ニ而往古々之仕來ニ御座候 御當地並京大坂ニ而開帳奉願候儀は修復難及自力節御願仕候仕來ニ而譯合違候事ニ御座候 云々（享和二・五・一六）

勸募の成績は時によつて種々の條件に影響されて所期の目標に達し得なかつたこともあり、殊に享和・文政兩度の江戸開帳は不況であつた。結縁を目的とした所の回國開帳も長期に渉る行脚はその任にある勸進僧の健康をも侵蝕し、例えば安永九年京大坂開帳のあと引きつづき六月から巡國に出生した慈薰僧正の如きは翌々年越後の十日町に到つた時病に倒れ、ついに天明二年六月二十五日遺骸となつて信州本寺に飯山し、その後の巡國豫定を中止したのであり、善光寺としては何の収益もなかつた。更に幕末期には出開帳による勸募は餘り効果がなくなつたのみでなく、却つて負擔となつた事もあるように見える。それは一般社會情勢からしてもすでに元祿頃から序々に活發になりつつあつた農民的貨幣經濟の發展等が根本原因となつて、支配階級の地位が動搖しつつあり、十八世紀頃から激化した各地の一揆のために封建的社會が末期症狀を呈しつつあつた點があげられよう。然して具體的に言うなれ

ば諸國には主家世繼問題・各武士間の地位争奪など保守・革新兩派間のさまじい對立抗争があつて、ことに藩主擁立をめぐり權勢の座をたてなおす爲贅昭の行つた水戸藩の儉約勵行の令・老中水野忠邦のなした幕府の經濟對策のための天保改革等が全國的に影響を及ぼしていた。それらは却つて中央の權威を失墜せしめ社會不安を醸成する結果をまねいたようであるが、斯様な騒然たる世情の中では長期にわたる出開帳など倒底不可能であつた。故に天保六年には善光寺首脳部は回國開帳を行う豫定を立て、一應寺社奉行等の許可を得たのであるが地元の強硬な反對にあつて、ついに坐折した程である。

去ル己年より諸事高直（値）ニ付參詣薄ク寺中町方共難渋之趣承及候 此上如來久シク御留守ニ相成候ハ、年々參詣も薄ク猶又一統困窮可相成哉ト被存候（下略）

〔如來三都回國〕（天保六・三・六）

斯くして江戸時代善光寺の出開帳は寛政三年の江戸開帳・同六・九年の回國開帳を最後として明治中期に至るまで一時斷絶したのである。然し財政面での成績のいかに拘わらず善光寺の存在そのものを全國津々浦々に喧傳した回國開帳・及び大規模な如來の動座によつて階層の上下を問わず多數の都人士を善光寺信仰に導入し得た三都開帳の効用は近世佛教史上輕視出來ない事實であると思う。

## 二、江戸開帳の概観

### a、起 源

三都開帳は伽藍の修覆が自力では及びがたい程になつた時募財の爲に行われたものであるが、特例として東叡山の輪王寺宮の發願招待によつて出府開帳された場合もある。即ち「享和二御願」三月十日には左の書面の到來した

記録がある。

一簡致啓達候

宮様益御機嫌能被爲成候 然は兼て善光寺如來御拜被爲在度御内願ニ而被爲 在候得共遠國彼是ニ只今迄御沙汰御延引に候處最早近年之内開 年限ニ茂相成候段被聞召何卒來春御拜被遊且諸人爲結縁序之開帳有之候様思召候 間差支茂無之候ハ、一山並役人共にも被相達宜御取斗可成候 恐々謹言

二月廿八日

住心院御書判

圓覺院御書判

大勸進權僧正

追而此度は於淺草寺境内開帳有之折々被爲成御拜被爲 在度思召ニ候 此段爲心得申達候 以上

ここで一應出開帳が瀕繁に行われたころの善光寺の状態を概視してみよう。かつて當寺は數度の火災を経験しているが、近世に於いては元和元(一六一五)年、同六(一六二〇)年、寛永十九(一六四二)年・元祿十(一六九七)年に各々被災している。元和元年三月十三日落雷で焼失した時には直ちに同年七月假御堂が出来、寶永三年一應再建、同六年八月再び焼失している。更に再興が成されたが間もなく同十九年五月西町より出火して本堂を失ない、そのあと假御堂建立の事について本堂は大本願のみで造營するといふ慣例があるのに對し異議が出、大本願大勸進の間で争いとなつたが十一月十九日幕府からの命によつて兩寺協力して再建する事となつた。<sup>10)</sup>その頃關東の佛教界には天海僧正が出で、將軍家と結んで日光輪王寺に法親王門跡を請い、京の叡山に對して東叡山の權威を確立して居り、自己の權力集中をはかつて他宗の寺院や廢寺までも何らかの由緒關係を求めて天台東叡山下に配屬せしめようと盛

んに策動していた。寛永二十年善光寺條目を下して當寺を東叡山末寺にし「自今以後不<sup>レ</sup>背本寺之下知」と定めているのもその一つとして行われたものであらう。

慶安三（一六五〇）年假堂が出来、寛文元（一六六二）年信州一國に限り勸進が許されて同六年には一應本建築が成ったが、粗雑且つ小規模のものであつたらしく元祿頃にはすでに相當損傷が目立つていた。當時幕府では諸寺に保護を加えて居り、ことに桂昌院及び綱吉の後援、柳澤吉保の配慮によつて復興を得た寺院は多數あつた。善光寺の三都開帳がはじめて行われたのはこのような風潮の時代であつた。

最初の三都開帳即ち元祿五年江戸本所回向院・同七年京真如堂・大坂天王寺において各々行われた結果は約二萬餘兩が集納され元祿十年二月二十七日から金堂再建が着工された。しかし同十三年七月二十一日下堀小路から出火し、すでに集荷してあつた大量の木材を焼亡したので時の大勸進見海法印は引責辭職をし、江戸保福寺の慶運が大勸進別當に就任して新規一轉再び出開帳による勸募が行われる事となつた。

慶運は大納言葉室頼孝の猶子で當時の大本願住職智善上人の父柳澤美濃守吉保の甥に當る俗縁もあつた。且つて日蓮宗悲田派の據點であつた江戸谷中感應寺が幕命により悲田派を禁じられ住職盛觀は追放されて居り、その後願主輪王寺宮公辦法親王・造寺檀那將軍綱吉の名のもとに天台宗に改められた同寺に元祿十二年三月八日より慶運が開基法祖となつて住してゐた。故に元祿十四年感應寺における善光寺江戸開帳から、寶永三年まで引つづいて行われた回國開帳は、彼の經營方針が時宜に適したものであつたろうがそれと共に權門貴仲の權威を背景とした實行力が大きくものを言つて相當の収益を上げ、寶永二年二月四日に着手された如來堂の普請は同四年八月十三日に至りついに完成入佛を得たと見るのである。現存する善光寺本堂はこの時のもので大工一六三、六二六人・同手傳二



○、○四〇人・木挽七三、六二〇人・同手傳一〇、二〇〇人の延べ人員により造られた。三棟撞木造、入母屋二重屋根唐破風總檜皮葺御所棟で、梁間二三・七メートル、桁五二・八メートル、高さ三〇メートル餘の雄大なものでこれに要した總額は二四、五七七兩（材木費52%、人件費36%）、その費用の大部分は出開帳における収益でまかなわれたと言われている。

設計は幕府の棟梁甲良宗賀、現場はその弟子藤田重三郎・木村萬兵衛などが當り、松代藩が幕府の指圖をうけて管理したのである。

本堂普請之儀は眞田伊豆守様御家中御相談成され候様に御公儀よりの御内談を以て兩寺より御頼み御座候云々〔如來三都廻國〕

善光寺の如來堂の儀は眞田伊豆守殿御世話にて本堂成就し、當七月十二日眞田伊豆守殿役人中より兩寺三寺中老僧堂奉行兩寺役人共方へ御引渡被成云々〔寶求四年訴狀〕<sup>(12)</sup>

かように一面では權門の好遇をうけて堂塔を再興し得たのであるが、その反面寺門運営に關して萬事東叡山の意に従い、幕府の阶入制肘を一層いちじるしくうけねばならなくなつたようである。

#### b、經過

ここで一應江戸開帳の經過を概観するが<sup>(表1)</sup>

(イ) 出願／＼許可、(ロ) 出府準備及び道中(ハ) 着府／＼閉帳、(ニ) 本寺版座

の四期に分けて考察するのが便宜であらう。なお今回は諸資料のうち最も詳細の知られる〔享和二御願〕及び〔享和今井用記〕の記載にもとづいて(日付)を記入する。

表Ⅱ 江戸開概観帳

願書	提出可 寺社奉行	日數	場所		開帳場
			開帳 逗留帳 留後	開帳 逗留帳 留後	
元祿五1692年	五年四月 四月十八日	往 開帳期間 五十五日間 (六月五) 七月晦日 整理期間 二十一日 歸途 八月二十六日出立	如來招待 (主ナ所) 八月五日御城入 八月八日大久保玄 善家 八月十日尾州家	本所回向院	八月七日淺草灯明 寺へ 八月二十一日上野 本坊法談所へ移 ル
元祿十四1701年	十四年一月 一月二十日	六十日間 (三月十) 五月十日	八月九日御城入 眞田家	谷中感應寺	千駄木保福寺へ
元文五1740年	四年十一月 十一月二十五日	六十日間 (六月一) 閏七月一日	閏七月五日尾州家 八日石川播守家 十日薩州家 十二日水戸家	回向院	閏七月四日本尊等上 野本坊(一同は灯 明寺)へ移ル 閏七月二十四日上野 常照院へ入ル
安永七1778年	六年三月 三月六日	十日間 八十日間 (六月一日) 閏七月二十二日	閏七月十三日戸田但 馬守家 八月二日眞田家 八月五日尾州家 五日黒田家	回向院	閏七月二十七日灯明 寺へ 閏八月四日上野護國 院
享和三1802年	二年五月十四日 七月二十七日	十三日間 八十日間 (六月一) 八月二十一日	九月五日眞田家 (南部坂やし き)	淺草傳法院	八月二十二日東江 寺へ 八月二十五日灯明 寺へ 八月二十七日護國 院へ
文政三1802年	二年閏四月十一日 五月一日	十三日間 八十日間 (六月一) 八月二十日	九月十二日眞田家 (同上)	回向院	八月二十五日灯明 寺へ 九月二日上野へ

概況	責任者		役人	智善上人 （同上）	誓興上人 （同上）	智觀上人 （同上）	智昭上人 （同上）
	三寺中惣代	大勸進					
盛況にて混雑のため開帳を五日くり上げる	圓乘院・玉照院	本孝法印	山崎藤兵衛	宮澤唯右衛門	大塚勘助	富岡治良右衛門	小日向貞助
	福生院	慶雲法印	今井磯右衛門	靈山院香嚴 （同上）	柄澤右平	柄澤彦右衛門	本覺院
収益多				寶勝院	靈山院慈薫	真覺院	林泉院
収益アリ				今井忠藏	中野治右衛門	中野治兵衛	代信受院
雨天續キ酷暑ノ爲不況・二十日間延期 収益少							上田丹下
欠損 （同上）							
欠損 （同上）							

江戸開帳を行うに當つては約二年位以前から計畫が立てられる。まず大體の期日を國元大勸進方で内定し（享和二年三月十一日）大本願役人の同意を得（同日）、大勸進役人が江戸に出張する。然して大本願の江戸別院である青山善光寺と連絡をとりつつ上野東叡山に「添簡書」即ち寺社奉行所宛（善光寺が出開帳を行う故許可されたい旨の口添えの書類）を下されるようお願い出る（二・一七）。その頃大勸進別当も信州から出府して東叡山に出頭し（四・四）、開帳場として借りうける寺を内々で検討し交渉をはじめめる（四・一四）。

開帳願書・江戸開帳先例書・奉持する靈佛寶物の目録等とどのうと東叡山の添簡書をそえて寺社奉行所へ願ひ出（五・二）、その段眞田家の江戸御留守居役へも申し入れる（五・三）。この願書の提出は元祿五・十四年の兩度は開帳の二〜三カ月前であつたが、だん／＼と早期に行うようになり安永・享和・文政度はいづれも滿一年以上も以前から許可を求めている。寺社方の裁可（七・二七）が下りると直ちに奉行所へ御請證文を出し、翌日開帳場とす

る寺院へ正式に依頼の使者を出し、又諸講中にも開帳豫定を發表して盡力を申し入れる。次に眞田家江戸屋敷・信州本寺に連絡し（七・二九）、町奉行所・新地奉行所へも届け出る。

なおこれらの依頼、裁可の折は必ず兩寺役僧役人が立合いで出頭し、提出の願書を受付けられた時には「願書御聞濟御禮」、許可が下つた時には「開帳御免御禮」と稱してその都度一同うちそろつて上野執賞、各奉行所役人の役宅等へ一々御禮に廻つてゐる。

（ロ） 出府準備及び道中

國元では開帳供奉の僧俗を人選し、老僧堂奉行等出府する場合にはその期間中の代役を定め、開帳中の心得を注意する（享和三年一月三日）。松代眞田家に使者を遣して渡船場の手配・道中警備の足輕等借りる事を依頼し、各宿場には人馬寄進を申し入れ（一・一二）、町年寄へも必要な人足等ととのえるよう交渉する（一・一五）。大本願側と道中並びに開帳中の金錢出納の事をうち合わせ（二・五）、供奉の人々に支度金を支給する（二・一二）。又御影等持参するものを準備し（二・一四）、道中の日程・行列次第等の具體案を作成し、眞田家と道中協力の件をうち合わせ（四・一〇～一二）、宿札などとのえる（四・二八）。

その間江戸では青山善光寺及び出張中の大勧進役人が中心となつて東叡山及び關係諸寺院・奉行所等と連絡をとりながら、開帳場に假小屋その他必要な諸設備を假設する。享和度は二年八月から製圖し、交渉をかさね三年三月二十六日に着工、開帳直前までかかつてゐる。又開帳場門前をはじめ兩國・日本橋その他目ぬきの諸所に知札を建て（二・八・廿六）、借りうけ寺院内における部屋割り（三・四・一）役割り分擔をきめる。更に如來出府の折には大本願上人・東叡山殿はじめ多數の僧俗が板橋驛あたりまで出迎えるので、板橋での宿寺の交渉、食事まかない

を手配し、眞田家・奉行所役人・諸講中世話役などにも着府及び開帳中の協力を依頼するなどあらゆる準備をととのえる。

國元からは行列出發より約十日程以前に御先觸れ及び荷駄が出府する（三・四・二八）。前立本尊＝鳳輦、釋尊・御印文・聖德太子・御三郷像＝以上輿、その他奉持するものの準備が完了すると（五・三）「御暇乞い」と稱し三寺中が拝見する。出立當日（五・七）は朝本堂で法要を行つたのち行列をととのえ、第一の宿丹波島まで兩寺關係の僧俗・町役人をはじめ一般信徒多數の見送りをうけながら進む。丹波島宿で晝食をしたため一同身支度を旅装に改め、松代藩内は眞田家役人の警固を得て道中する。往途は途中で逗留する事はないので各宿一泊づつ、本陣その他のに分宿し人馬寄進をうけつつ十日後江戸に到着する。なお碓氷峠は難所のため兩度小休があり、中え茶屋で釋尊像を長持にうつし本輿は空のままで峠をこえる。ここを無事通過すると一同に對して上人から酒代、大勸進から祝儀の酒肴の出るのが例であつた。

江戸着の日（五・一七）はまず板橋宿で旅装を解いて本行列で江戸の宿寺に入るのであるが、板橋宿には僧俗多數が出迎え、東叡山衆・諸講中なども各々行列に加わる。大本願上人も青山在住の場合は七十餘人の本供で來られ、宿寺では早速如來に焼香禮拜し信徒に對して十念を授與される。この時日光門主御代參もあり僧俗一同拜禮の後おのゝ引きとる。

#### （八） 着府＝閉帳

江戸到着後開帳のはじまる迄には大體半月内外のゆとりがあつて尊像寶物等を所定の場におさめ、役人役僧世話人の詰所をととのえ、東叡山・奉行所・眞田家等へも挨拶に出向く。開闢（六・一）には御門主拜禮又は代拝があ

り、導師及び式衆も東叡山衆中が多數出仕し、善光寺の大勸進及び三寺中供奉の僧も全員法要に列し、開龕のあと大本願上人が焼香せられる。

開帳期間中は毎朝六ツ刻乃至六ツ半に「御戸開帳」の儀即ち晨朝法要があり大勸進別當が本尊前及び釋尊前にて焼香・三禮・佛器加持を行い、暮七ツ半刻「入相閉帳」を行うまで随時法要・說法等が行われた。法要は普通施主開帳又は施主念佛と言われるものであるが、特に願いがあれば施餓鬼會・百萬遍なども行われた。期間は大體六十日が規準であつたらしく、その中間（七・一）には「中日回向」がなされる。なお何らかの理由があつて日限の變更を望む場合は、閉帳豫定の約二十日程以前に願書を提出する。即ち元祿五年には六月五日から六十日間の豫定であつたのに、餘りの盛況で死傷者が出るなど混亂した爲五日くり上げて七月晦日に閉帳して居り、安永七年、享和三年、文政三年はいづれもはじめ六月一日から六十日間の予定であつたが、不況のため延期を乞ひ八十日間開帳している。この場合も兩寺の連署で上野執當より御添簡をうけ（七・八）、日延願書・日延先例覺・御添簡書をとそろえて寺社奉行に（七・一〇）出頭し、その許可を得て（七・二七）、町奉行御月番・眞田家（七・二八）及び新地奉行所（八・二）にそれ／＼届け出ることに開帳願の場合と同様である。

結願にはその前日の夕刻から諸講中をはじめ一般信徒も多數參籠して各部屋に分宿し、上人方一行も一泊する。惣閉帳（八・二一）は八ツ時から行われ、結願法要には東叡山衆多數が出動し、上人焼香の後鎖龕する。

### （二） 本寺飯座

閉帳の行儀が滞りなく終ると兩寺の役僧役人は即刻東叡山執當・奉行中月番・新地奉行所等へ挨拶にまわり（八・二一）、翌日から開帳場のあと片付けにかかる。即ち靈寶を護國院にうつし假小屋などをとり拂いすべてもと通

りにして供奉の一同は宿所の燈明寺にうつる（八・二五）。その後要請があれば上野東叡山内でも「内開帳」を行い御門主等の拝禮の便を計っている事が「開帳後先例」によつて知られる。

一、元祿五申年六月五日より八月五日迄本所回向院において開帳後 同八月七日寺社御奉行所戸田能登守様江御届之上同日淺草灯明寺江引移十五日逗留仕右之間朝開帳等之法式相動候 同月廿一日上野御本坊法談所江引越五日逗留開帳仕候 御門主御拝禮後諸人參詣仕候 同月廿六日本尊並靈寶等不殘今朝法談所御發興 別當大勸進本孝供奉信州善光寺江皈國仕候  
（元文五年七月）

またこの間に將軍家や諸大名より如來を招待されることもあつた。「御城入先例」その他の記録には元祿五・十四年・元文五年の登城の儀が見える。又諸家の中では眞田家に江戸開帳の都度必ず招待されたのをはじめ（尤も元文度は藩主皈國の都合上開帳前に招待を申出で、前例がないので斷つて居る）、水戸家・尾州家・石川播磨守・戸田但馬守その他の邸に招かれている。しかも善光寺では傳統的な「朝開帳」の法儀を非常に重視して居り、開帳中は無論のことその前後の江戸滞在期や往復の道中においても、本寺同様一日もかかさず行うのであつて、登城や諸家招待の折も朝開帳の懈怠する事を憂えて必らず宿寺に日皈りしている。「御城入先例」

一、寺社御奉行牧野豊前守殿において善光寺別當大勸進靈山院江被仰渡候は

善光寺如來靈寶等御部屋様御覽遊候間開帳相濟大奥江上候様可取斗候 二三日止宿被仰出候 此度は本願茂能出候様被仰渡候 日限之儀ハ追而沙汰可有之候 右ニ付掛り神保和泉殿に先格書付持參萬端可相伺候

右之通被仰渡奉畏候 然ル處善光寺において差支之義は 御城に二三日如來御止宿之内往古々朝夕無怠慢常恒不易之作法勤り兼可申 云々（安永七年閏七月九日）

歸國は大體惣閉帳の約一カ月後である。出立に當つてその數日以前（九・一二）から眞田家・町奉行所等に道中の警固手配を依頼し、如來發興の時（九・一六）は板橋宿まで上人一行も本供揃いで行列に加わり、東叡山衆及び講中その他信徒多數も奉送し、眞田家・奉行所などからも到着の時と同様警固人數が出される。板橋宿で上人はじめ奉送の人々は焼香暇乞いし・別當以下歸國の一同はここで旅装をととのえ出發する。

歸山の道中では地元の筋望に應じて一兩日乃至數日程度の逗留開帳を行うが、その爲には相當早くから寺社奉行に願ひ出で準備を行う必要があつた。享和度の如きは開帳前年の享和二年夏、本庄宿威徳院（八・二三）、武州上之村久見寺及び川越早又村光明寺（八・二八）、高崎法輪寺（九・四）などから各々先例を申しそえて江戸開帳の歸途逗留せられたい旨願ひ出ている。しかし餘り遠方まで順路をはずれて出向くことは許されなかつたらしく、享和今井用記四によると三年八月二十三日寺社奉行阿部播摩守あてに逗留願ひを提出し、許されなかつたので同二十五日再び願書を出した記録がある。

# 一、奉願上候口上覺

善光寺本尊御當地出立歸山之節武州上之村久見寺並上州妙義山江立寄呉候様達而相願候間 右兩所江立寄四五日宛逗留且又道中筋ニ而無據相願候驛ニ而ハ二三日宛致逗留拜爲致候様仕度奉双候む先々之例委細別紙ニ認差上候何分、御憐愍を以願之通被仰付被下置候ハ、難有仕合奉存候 尤出立日限之儀 追而御届可申上候

亥

信州善光寺

八月

大勸進

眞覺院權僧正



一、昨日被差出候歸國道中ニ而逗留願之儀久見寺並妙義山江立寄逗留之儀甚不宜候 其譯は此度は江戸開帳而已之願ニ候間 歸國之節半里なりとも外々江立寄候而は不相濟事ニ候 夫共押而相願候ハハ御老中へ可被伺候得共其節ニ至り道中之外兩所江立寄候義何か私欲ケ間敷相聞候旨ニ而御差留ニも相成其上道中朝開帳迄も差留之御下知萬一有之間敷哉や難斗候 左候得は常住不退之法式ニ差障り可申哉なと内々利解被申聞 尤元文之例は有之候得共安永之節外道江立寄例無之旁ニ候間安永之近例通りニ取斗候ハハ差支無之候間 願書認直し出候様深切ニ被申候

この時は結局蕨宿より矢代宿まで十九宿のうち六カ所で計二十四日逗留している。即ち桶川宿淨念寺で六夜・深谷宿西蓮寺三夜、本庄宿圓心寺及び威徳院六夜・新町宿寶勝寺三夜・高崎宿法輪寺六夜・安中宿莊嚴寺四夜他はいづれも一兩日の泊りである。右各宿では既述の如く善光寺本堂と同様に朝開帳・施主開帳をとり行う立て前であるから、それを以つて近在の人々と結縁した事が推察される。故に歸途の所要日數は不定であり、享和度は四十五日、文政度は四十一日を費して本寺に還座している。(表Ⅱ)

信州においては松代宿のあたりまで出迎える人もあり、漸次奉迎の人數が増加して、矢代宿には善光寺周邊の町村の庄屋・被官はじめ人足約二百人等が加わり、同宿から本行列となつて歸山する。本寺では直ちに全山の僧侶のこらず出仕し大勸進導師のもとに還座法要を執行して後解散する(一一・三)

還座後は諸方面に對する挨拶・決算・慰勞等種々の事後處理があつたであろうが用記等には記されていない。ただ大本願側の記録として〔奥日記〕享和三年を見ると町年寄・庄屋・御用達・御出入の者など御祝儀に伺つた人達を招いて酒肴を饗し(一一・六)、松代眞田家に開帳完了の報告及び御人數拝借・渡船場及び領内宿驛に對する人

表Ⅲ 道中宿泊

馬寄進手配等に對する謝禮の使者を出し（一一・九）、役僧役人等に手當て金が出される（一一・三〇）。然して御還座後の「御回向」が引つづき行われる筈であるが亨和度は寒冷の後となつたので明春行ふ事とし、その日限を「來三月十日・日數五十日之間」と決定してその爲知札を二天門の前に建立する（一二・一三）。

以上が江戸開帳の概略であるがこの間に要した日數は亨和・文政兩度の例を見ると善光寺を出立してから十驛各一泊づつで江戸に着き、準備期間約半月、開帳六〇八十日、更に約一カ月程度滞在し、四〇五十日を費して歸山するまで約百七十餘日を要している。しかしそれ以前の願書提出から江戸表開

往途 文政兩度とも		歸途 享和三年		歸途 文政三年	
江戸着	五月十七日	江戸發興	九月十八日	江戸發興	九月十九日
蕨宿	一泊	蕨宿	一泊	同上宿	一泊
桶川	一	桶川 <small>（淨念寺）</small>	六	同上宿	一
熊谷	一	鴻巣 <small>（小池山太夫）</small>	二	同上宿	一
本庄	一	熊谷 <small>（石上寺）</small>	一	同上宿	一
板鼻	一	深谷 <small>（西蓮寺）</small>	三	同上宿	一
坂本	一	本庄 <small>（國心寺）</small>	六	同上宿	一
輕井澤	一	新町 <small>（寶勝寺）</small>	三	同上宿	一
小諸	一	高崎 <small>（法輪寺）</small>	六	同上宿	一
上田	一	安中 <small>（莊嚴寺）</small>	四	同上宿	一
矢代	一	松井田	一	同上宿	一
計	十日間	坂本	一	同上宿	一
		追分	一	同上宿	一
		輕井澤	一	同上宿	一
		小諸 <small>（光岳寺）</small>	二	同上宿	一
		坂木	一	同上宿	一
		矢代	一	同上宿	一
		計	四十五日間	計	四十一日間
善光寺出立	五月七日	善光寺還座	十一月三日	善光寺還座	十月二十九日

帳場の整備、信州における出府計畫一切、並びに還座後の種々の事後處理のなされた日數までを加えると約二十年前後の歳月を要したのであった。

## c、人員

出開帳の折如來に供奉して他地に出勤するということは非常な名譽として山内の僧侶がひとしく希望したらしい。故にその人選には慎重を期したのであるが、最初の江戸開帳はことに問題が多かつた。「如來三都廻國」によると元祿五年の出府には我れも／＼と随行を希望して中々まとまらず、すでに出願及び諸準備のため數人が出府している事であるから如來御出座には衆徒老僧三人の内から一人・物書役として常智院・中衆老僧三人の内から一人・縁起講談役に隨行坊・の四人が従い、計十人とする。開帳中に必要が生じた場合は東叡山の所化を備僧し、更に止むを得ない事態となれば信州に指名しあらたに出府させるといふとりきめがなされた。所が國元ではこれを不服とし東叡山から僧を頼めば禮金もいる事であるからその分を我々の路銀とし、二十日づつ交替で全員を出府させられた旨主帳した。然も早く出かけるものは歸る事をきらい、後からのものは早く出府したいと本寺における勤務をも隠居衆に押しつけるなど収拾がつかなくなつた。果てはこんな事になつたのもとは法印（大勸進別當）が不申斐ないからである、など言い出すしまつとなり法印に對して

本願や寺中とも相談の上病人酔狂者をのぞき、三寺中四拾六坊も有能無能老僧若僧上座下座よく／＼取合て三分公事を出して江戸くみ 京くみ 大坂くみ三所之奉加に三分一ツツ 云々（元祿五・六・五）  
適宜に案分して全員を召しつれられるよう提案している。

また安永度の三都及び回國開帳に供奉出來なかつた白蓮坊が、享和度の江戸開帳にも隨行を命じられず弟子法嚴

が指名されたのを不服として、隠居したいと申出でた爲その心情をくみ特に召連れられるようになった例も〔亨和今井用記一〕に見える。

一、

白蓮坊

右は先日弟子法嚴江供奉被仰付候得共其之儀安永御開帳並廻國御供ニ茂相洩 法嚴いまだ若年に候旨被聞召依之乍大儀其元致供奉候様被仰出候旨申達之

但シ白蓮坊事此度之供奉ニ洩候事甚心外ニ存 隠居可致旨内々老僧迄も願書差出候段御聞被成格別之思召越以右通被仰付候也 (亨和三・一・一五)

これらによつてもいかに衆僧が出府を切望していたか推察される。しかし全山移動する譯にも行かないので約三分一内外の僧が隨行したようである。はつきり記されているのは

・安永度二十人(衆徒十人・中衆七人・妻戸三人)

・亨和度十八人(ク 八人・ク 七人・ク 三人)

・文政度十五人(ク 八人・ク 五人・ク 二人)

の三回である。これら僧職以外にも多數の役人や薦人足などが同行したのであつて〔亨和今井用記一〕によれば兩寺役人三人・勘定方三人・小奉行三人・醫師一人・町方に依頼した人足百五人・馬三十二疋となつてゐる。〔同〕亨和三年四月二十二日付の道中宿泊割りは次の如くである。

本陣(本尊御宿)――本尊・御印文・常灯明・常香・双盤・散錢箱・善光卿三鉢・その他長持荷物等――衆僧上下

三十人程

釋尊御宿——釋尊・散錢箱・荷物||衆僧上下二十人程

脇本陣（別當宿）——乗物・長持・荷物人駄||善光寺別當 上下二十五人程

役人宿——荷物・長持||上下十一人程

壹番宿——荷物||上下九人程

貳番宿——荷物||三十人程

參番宿——荷物||二十人程

なお各宿驛では人馬が寄進され、通例本陣はじめ世話人等が隣接の宿驛まで迎送している。殊に松代領内では丹波島宿・矢代宿に職方月番警固方を出され、享和度は前日（享和三・五・四）から出水が激しいので市村渡船場に松代普請懸り役人衆四人及び人足二百人が出役し整備に當るなど、眞田家の協力もあつて、大名行列にも足敵する程の威儀をととのえた行列であつた。

板橋と江戸宿所との間は大本願上人一行七十餘人・東叡山衆中八院（但シ各住職に供侍二人・下部十人づつ従う）。眞田家や町奉行所から提供された人数や奉迎の講中などを加えると實数は未詳であるが〔享和今井用記二〕に板橋宿で主要の僧侶に一汙三菜の齋を出し、その他に赤飯千人前を用意したとあることからしても相當多くの人員が動員されたと推測する事が出来る。

一、赤飯千人前申付候上野衆講中之者人足共へ遣之（享和三・五・一七）

開帳期間中には別當以下信州より出仕の僧及び東叡山の僧が法務を執行し、雜務は國元から出府した兩寺役人・勘定方・小奉行・門番（四人）・夜番（二人）その他諸役・眞田家下役人・町奉行所役人・江戸諸講からも交替で

開帳場に常詔し協力がなされる。薦の者も信州からは〔亨和今井用記二〕の例では二十五人が出府し、内六人は開帳中ずつと滞在するが他は「應歸國し、淺草寺の薦に（毎日十八人づつ）依頼して立番せしめている（亨和三・五・一四）。

# d、經濟

江戸開帳は前提の年表に依つても知られるように元禄五年五十五日間・同十四年六十日間・元文五年六十日間・安永二年八十日間・亨和三年八十日間・文政三年八十日間の六回計四百十五日行われた。その間の収支決算は今回所見の資料においては正確に知る事は出来なかつた。ただ六回の開帳中まとまつた収入手控え帳のあるのは安永文政兩度のみであつて、前者は御本堂散物以下七項目・後者は御賽物以下四項目を毎日克明に記してある。しかしこれは兩者とも惣収入の一部にすぎず、この他になお各種の収入のあつた事が知られる。數種の用記・日記等の中に斷片的に記されてあるものを抽出すると當時の収支の項目は次の如くである。

## ・収入

回向料Ⅱ永代月牌・御十念料

特別法料要Ⅱ施餓鬼會・百萬遍等

寄進Ⅱ本尊前・釋尊前等の賽錢・奉納所納り・屋根板料・常灯明料・御膳料

諸勸物Ⅱ御血脈・御影・御印文・護符・諸縁起等

特別寄進Ⅱ將軍家奥向・諸大名・日光門主等參詣寄進・及び右各所より請待の折の信施

講金Ⅱ善光寺念佛講中（江戸に三十組あり）

表 IV

安永七年〔如來江戸開帳〕 〔勸化物立合控〕より		文政三年〔如來江戸開帳〕 〔御用日記〕より	
御本尊御散物	銀金 二兩一分 二朱一匁三分 二五八六八六六八文	御賽物	金 七兩二朱 錢 九四三三
御印文料	銀金 六五兩二朱 六朱三三五匁一三三分 一九九九一六八七文	御印文	金 一兩二朱 錢 二八七七一〇〇文
過去帳	銀金 五兩二朱 八朱	過去帳	金 一兩 錢 六四二〇〇文
屋根板料	錢 四二六六六一文 二二〇三二五文	屋根板寄進	金 一分
奉納所納り	銀金 四四九兩三朱 一〇枚三八粒 二七〇九匁四三三分 一八一四八六文		
御膳料	銀金 一二六兩三分 八六匁	計	銀包 三八四兩二朱 金 二七五匁 (此金 一二兩三分 但一包三匁平均之積にて)
常灯明料	銀金 一六兩三分 二朱七匁五分 七三三〇〇文		白銀 八枚 (此金 六兩) 銀 二二匁五分 (此金 一分二朱) 錢 三二九七二文 (爲金 四兩三分二朱 兩替 六八〇〇文)
計	銀金 八六八五兩三分二朱 四一七匁六分 (爲金 六六兩一分九匁 銀 六十匁 錢 三六一六六四文 爲金 六〇四一三六四文 錢兩替 六六文)		
惣高	銀金 八八一二二朱 錢 九匁 一六三六四匁	惣高	金 四〇八兩二朱

備考 右の他永代月牌料・施餓鬼布施・同賄料・戸帳代料・永代高盛料等あるが別帳(欠)にてここには集計せず

雜收入Ⅱ道中奉賽・現品（佛供米・卒塔婆・提灯等）

・支 出

需要費Ⅱ營繕費（假小屋・番所・諸設備及び知札等建立につき材料費・施工費・大工手間賃など）

消耗品費（香・灯燭・紙等）

印刷費（御影・御血脈・諸縁起等）

光熱費（火ばち）

被服費（役僧法衣・役人肩衣・人足法被等）

人件費Ⅱ出府支度金及び歸國旅費（三寺中僧侶・兩寺役人・鳶人足・馬方等）

諸手當Ⅱ開帳中及び終了後（僧俗全員）

宿食費Ⅱ道中及び滞在中における平常宿食・祝日慰勞等の酒肴（僧俗全員）

謝禮金Ⅱ開帳場借用につき（寺院宛及び同寺僧俗各人宛え）・法要（開闢・結願）出仕につき東叡山衆中之・行列

迎送警固及び開帳中手配につき（東叡山・寺社奉行所・町奉行所・眞田家等之）

交際費Ⅱ諸祝儀・慶弔費・接待費（茶菓・煙草・時齊等）

その他Ⅱ諸雜費

以上は一應の分類であつて一貫した考察をする事は不可能であるが、いささか説明を加えておこう。収入の中樞となつたものは安永・文政兩度の手控え帳にも見る如き日々の奉賽や回向料・御印文等である。特別法要料や特別信施などは大口ではあつてもいわば臨時収入で餘り重要視されていないようである。故に用記・日記等にも諸大名



奥向よりの参詣は枚舉に遑ない程多く見えるのに、その寄進金品についてはごく稀にしか記入されていない。御十念及び御名號は主として大本願上人参詣の都度出されたものらしく大勸進側の資料には記録がない。〔奥日記〕によると享和三年は五回の参詣で壹萬四百枚以上の御名號授與があり、うち参回の冥加料七十貳〇九文・文政三年は御名號・御符・御血脈を一諸に記してあるが五回の参詣で金四兩三分二朱・銀五匁・錢百拾五貫百七拾五文の冥加料の収入がある。<sup>(表V)</sup>

表 V

享和三年			文政三年		
月日	御名號	御初尾	月日	御名號 御血脈等	御符 御初尾
六月一日	三〇〇枚	不明	六月一九日	枚數不明	五〇三七文
七月二三日	六〇〇枚にて不足	〃	七月二日	〃	金三兩三分餘・錢八〇四六五〃
八月一〇日	一三〇〇枚にて大きに不足	一二〇四〇六銅	七月二〇日	〃	金二分二朱・錢二〇〇五〇〇〃
八月一七日	三〇〇〇枚	二〇〇七五八〃	八月一〇日	〃	二八〇二〇〇〃
八月二一日	五二〇〇枚	三八〇八四五〃	八月四七日	〃	金二分・銀五匁・錢五二施六八三文
計(三回)		錢七二〇九銅	計(五回)		金四兩三分二朱 銀五匁 銀 一一五四一七五文

又眞田家からは諸種の協力をうけているので、特別の人には眞田家張番所から鑑札が出され「内陣通りにて参詣」をさせた事が〔享和今井用記二〕中野治兵衛宛眞田家留守居役よりの手紙に見え、その事からして一般拝觀者には

現行の内陣券の如きものが何らかの形で發行或いは代金徵集がなされていたと類推してよいと思う。

追啓 兼而及御談申置候内陣入之印鑑開闢中無據もの相願候節は右印鑑爲持遣候間 印鑑御引合御内陣江御入可  
と下候何分奉頼候 尤先年は右印紙御取拾にて御返却にも不及趣に舊記ニも相見候得共 夫ニ而ハ猥ニも相成如何  
敷御咄候間今度は乍御世話假番所番人交替之節ニ御戻可被下候 何分奉頼候右御頼旁如此御座候 以上（享和三・  
五・二八）

毎日の一般民衆からの奉加や諸勸物領布による収入の集積がいかに輕視出來ないものであつたかは〔同四〕の中に  
享和度の開帳が非常な不況であつたのにもかかわらず、金貳萬疋を血脈の冥加錢等の中から僧正の一存で、日光  
門主に献上している事によつても推察される。

一、此度開帳後淺草掛りの御役人中は勿論道心下部等迄江上る苦身料被下置候而御殿之御物入多く掛り候由 僧正  
承り氣之毒ニ奉存候得共、此度は開帳收納少く入用ニも引足不申候間右御入用差上申候儀も成兼候、依之僧正之  
方江少々宛別段ニ相納ル血脈冥加錢等有之候間、善光寺付役人共江も不申間内献上仕度旨被仰上、金貳萬疋 被献  
上候也

但シ此儀用記ニハ留置間敷旨僧正被仰候得共後來爲心得記置候也

この時の御血脈はどの位領布せられたか數量もそれに對する志納金額も不明であるが、開帳前に約五萬を用意し  
て居るのでその全部ではないとしても相當多數出たのであろう。なおお血脈ばかりでなく、同時に國元では次の品  
々が用意された事が〔享和今井用記〕に見られる。

一、諸御影等用意左之通

一、被甲佛御影 拾萬

一、御印文御影 拾萬

一、御中丈 三千

一、御本丈 貳百枚

一、釋尊御影 貳千

一、聖德太子 千枚

一、月水守 五千

一、略縁起 五千

一、常灯記 千枚

一、御印文記 千枚

一、佛餉袋 五萬

一、諸御影板行

一、御血脈 五萬

一、御火打 參千挺（以上享和三・二・一四）

一、杉原紙百束用意便之節遣之

一、晒蠟燭五拾匁 六千挺

一、同三拾匁 千挺

善光寺の江戸開帳について

右四月下旬迄ニ追々遣之

(略)

(同

・一六)

右のうち佛餉袋・紙・蠟燭以外は参詣人に領布したのであらう。その志納金額は何れも零細であつても、これだけの數量からする集計は相當な額に達したのであらう。

特別法要による収入は篤信者からの懇望により行われたもので特に大きな収入とはならなかつたようである。又特別信施は將軍家奥向・諸大名・日光門主等が参詣又は招待された場合の寄進である。これら深窓の貴人達は開帳場に参詣もされるが、餘り瀾繁に向向かれる譯には行かなかつたと見え、開帳後如來を招待された例は非常に多い。

大奥又は元禄五年八月五日、同拾四年八月九日、元文五年七月参日の三度、二ノ丸三ノ丸へ入り將軍以下の拜禮をうけ御印文頂戴の儀もあつた。人足多數の送迎をうけて登城し大奥では如來・釋尊・参卿像を安置す可く臺や戸帳を新調し多くの金品の施入があつた。なお安永度は七月参日に將軍家の回向院参詣があつたが、御城入りは同七月九日寺社奉行を通じて交渉がなされたが都合で拾九日とりやめと決定し〔安永七奥日記〕、それ以後行われた記録はない。これら將軍家との交渉については〔御城入先例〕〔如來三都廻國〕をはじめ各種資料があるが、ことに元禄拾四年の桂昌院感應寺参詣及び御城入りの儀は徳川實記卷四拾三・四<sup>(註)</sup>にくわしく見える。

諸大名・旗本衆等の参詣に關しては〔享和今井用記〕の記事からして別に「玄關帳」と稱する明細書きのあつた事が知られるが、現存しないので用記や日記による以外知る方法はない。それら諸家との親疎の程度は開帳の都度まち／＼であるが、就中常に最も近密な關係にあつたのは眞田家であり、毎回藩主奥方等の参詣があり、閉帳後は如來を私邸に請待している。享和度の特別信施の例は別に表示した如くである。<sup>(表四)</sup>

A  
御城入りにて

善光寺の江戸開帳について

表Ⅵ 特別信施

B 東叡山より

	奉納内譯	差出	施入	備考
享和三年九月四日	(御招待にて) 御備へ	日光門主	白銀一枚 三ツ具足・生花 五々三御前等	○御迎へ人数三十四人派遣サレ表御門ヨリ法談所へ入ル ○大勸進ヨリ金二萬足献上
同 六日	(開帳中大儀につき) 僧正へ 法成院へ 上田丹下 今井・中野 (二人) 社運院・一乘房弟子 (二人) 醫者 (一人) 被官等 (五人) 藥王院・常德院 (二人) 衆徒 (八人) 中衆 (七人) 妻戸 (三人)	日光門主	銀 一五枚 三枚 金 三〇〇疋 三〇〇疋 三〇〇疋 一〇〇疋 一〇〇疋 一〇〇疋 二〇〇疋 一〇〇疋 五〇〇疋 二〇〇疋 銀 一八枚 四六〇〇疋	綸子三反鉤子一卷等あるも物品は略す
計				

表Ⅵ 特別信施

C 真田家ヨリ

	奉納内譯	差出	施入	備考
享和三年六月一八日	如來前 僧正へ 役僧役人へ	真田右京太夫奥方 (參詣にて)	金額不明 白晒三反 金額不明	○寺ヨリ善光寺如來金佛 一體觀音經一卷進呈
同 八月八日	如來前へ 御印文へ 釋尊へ 大本双上人 僧正 法成院 堂内役僧(二人へ) 今井磯右衛門	右京太夫 (參詣にて)	金 五〇〇疋 〃 二〇〇疋 〃 一〇〇疋 〃 菓子 一ハコ 〃 反物 金 二〇〇疋 〃 一〇〇疋ヅツ 〃 二〇〇疋 金 一四〇〇疋	
同 九月五日	御備へ 御内々 御備 御内々 御備	右京太夫 〃 奥方 〃 豊後守奥方 真田久次郎御隠居 その他奥女中等十人ヨリ	白銀 三枚 〃 五枚 〃 二枚 〃 五枚 〃 二枚 金 一〇〇疋 〃 一〇〇疋 〃 一〇〇疋	造花御備一對等あるも物 品は略す

計	同 九月一二日	計	この日散物として同途 中散物
	(如來招待後の挨拶) 法成院・常德院 (二人へ) 寶勝院等(四人へ) 今井磯右衛門へ		成徳寺御隠居ヨリ その他 六人ヨリ 町名主等ヨリ
	真田右京大夫ヨリ		玉銀 二 錢 二ツツ 三 五〇〇文 四 三 二一六文 三 二 二〇〇文
	金 五〇〇疋	白銀 一七枚 玉銀 二〇〇疋 錢 四九 九一六文	
	銀 二〇〇疋ツツ		
	金 二枚ツツ		
	銀 二〇〇疋		
	金 一一〇〇疋		
	銀 八枚		

表Ⅵ 特別信施

D その他諸家

享和三年六月二五日 同 七月一五日 同 八月三日	奉納内譯	差出	施入	備考
如來へ 〃 大本願被官中へ	淺草代官 一ツ橋民部卿 堀田大藏大輔		金 一〇〇疋 金 一〇〇疋 金 一〇〇疋	參詣の節内陣人拂いにて 善光寺より瑠璃壇木材で 彫造の大黒天像を贈呈



	御印文 計	四人 五〇人	〃	一一〇 <small>匁</small>	但シ往復にて 一一一〇 <small>匁</small>
同 日	御陸尺 御箱持 宰領 若党 鳶 計	六人 五人 八人 三人 二五人 四七人	金一兩一分ヅツ 一兩ヅツ 二分二朱ヅツ 二分二朱ヅツ 三分ヅツ	金 七兩二分 五兩 五兩 一兩三分二朱 一八兩三分 金 三八兩二朱	
同 日	鳶 御仲間新抱へ並家中供 〃	六人 六人	一〇匁一分ヅツ 金一兩二分ヅツ	金	
同 四月一六日	大本願役僧（宗光寺） 〃 役人 計	一人 二人 一人	金 三兩 〃 三兩	金 六兩	
同 五月一四日	淺草鳶ノ者（開帳中立番） 計	一人 一人 一八人	銀 三匁ヅツ	一一七匁 九 <small>匁</small> 三六〇匁	但シ食事先方もち八十日間にて

B 手当、慰勞

開帳日延ニツキ苦身料	人	支拂	小計	備考
享和三年 八月五日	法成院 大勵進役人 藥王院 常徳院 衆僧 道心者 御次僧侶 御用部屋 勘定方 小奉行 醫師 御仲間 宗光寺 大本願役人 御雇(楊善房) 々(石川良助) 法成院の家來 役人の家來 計	一人 金 三〇〇疋 二人 三〇〇疋ヅツ 一人 〃 一人 〃 一八人 二〇〇疋 二人 二朱ヅツ 不明 二〇〇疋ヅツ 不明 〃 二人 〃 三人 一〇〇疋ヅツ 一人 三〇〇疋ヅツ 不明 〃 一人 鳥目五〇疋ヅツ 金 三〇〇疋 一人 〃 一人 〃 一人 二〇〇疋 不明 鳥目五〇疋ヅツ 不明 〃	金 三〇〇疋 六〇〇疋 三〇〇疋 〃 三六〇〇疋 四朱 四〇〇疋 三〇〇疋 〃 三〇〇疋 〃 二〇〇疋 金 七六〇〇疋以上 四朱 鳥目一五〇疋以上	人數不明の分は各一人 分として計算

同	八月九日	如來前へ	御印文	〃	釋尊	僧正へ	法成院	藥王院	常德院	上田丹下	今井磯右衛門	計	
												松平相模守奥方	
金	五〇〇疋	三〇〇疋	二〇〇疋	二〇〇疋	二〇〇疋	一枚	二〇〇疋	一〇〇疋	一〇〇疋	一〇〇疋	一〇〇疋	金 二一〇〇疋	白銀 一枚

次に支出のうち詳細の知られるものは、<sup>表Ⅶ</sup>人件費・<sup>表Ⅷ</sup>謝禮金などであつて、需要費も相當高額を占めたであろうが、食費、營繕費等の概略が知られるのみでその明細は未詳である。

## 表Ⅶ 人 件 費

### A 支度金（信州より供奉の者へ）

支度金渡シ	人 數	支 拂	小 計	備 考
享和三年 二月一二日 老僧役（藥王院） 堂奉行役（常徳院） 三寺中衆僧	一人 一人 一人 一八人	金 三兩 三兩 三兩 二兩ヅツ	金 三兩 三兩 三兩 三三兩	内一兩ハ若黨料

	<p>釋尊所（世尊院） 道心者 御供所（堂明坊） 道心者 醫師 勘定方 小奉行 大勸進進役僧 〃 役人 大本願役人 出家中 御近習中 御侍 計</p>	<p>一人 一人 一人 二人 三人 一人 二人 一人 不明 〃 〃 三五人以上</p>	<p>二分 二分 三兩 一兩一分ツツ 一兩ツツ 三兩 三兩ツツ 三兩 二兩ツツ 二兩ツツ 一兩ツツ</p>	<p>二分 二分 三兩 二兩二分 三兩 三兩 六兩 三兩 金六四兩二分 以上</p>	<p>内一兩ハ若黨料 内一兩ハ若黨料 人數不明の分は各一人分 として計算</p>
<p>同 四月四日</p>	<p>（御供人足・一〇五人） 御供所長持 一棹 御寶物長持 四棹 奥長持 三棹 供長持 一棹 双盤 四 賽錢箱 善光脚御興 御灯明 常香 御本尊御鳳輦</p>	<p>二人 八人 六人 二人 二人 八人 六人 二人 二人 八人 八人</p>	<p>錢 二ノ二〇〇文 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃</p>		

表Ⅷ 謝 禮 金

同 一 月 三 〇 日	吉村富右衛門 柄澤彦太夫 〃 〃 宗光寺 計	一人 一人 一人 三人	金 二〇〇疋 銀 五枚 金 五兩 金 五兩 銀 五枚 五兩	祝儀 太儀料 別に被下 祝儀 太儀料
九 月 一 五 日	御還座手當 人足 辨當持雨具持等 馬子	一〇六人 一四人 二五人 一四五人	錢 一〇〇文 〃 二〇〇文	一二貫文 五貫文 一七貫文 爲金二兩二分

享和三年 五月二〇日	如來着府警固につき 上野執當御兩院宛 両御手替 坊官衆 御用人衆	二人 二人 八人 不明	金 二〇〇疋 二〇〇疋 一〇〇疋 一〇〇疋 二〇〇疋 二〇〇疋 一〇〇疋	金 四〇〇疋 二〇〇疋 一六〇〇疋	物品の進呈もあるがす べて略す
---------------	--	----------------------	--	-------------------------	--------------------

善光寺の江戸開帳について

計	田村權右衛門手代 同心 淺草御納戸衆	二人 五人 二人 二人	二〇〇疋ヅツ 一〇〇疋ヅツ 一〇〇疋ヅツ	四〇〇疋 五〇〇疋 二〇〇疋 三三〇〇疋	但し御用人衆人數不明 につき除く
計 六月六日	板橋まで出迎え及び開 扉出仕につき 導師 上野衆中	一人 一人 一九人 二〇人	銀 三枚 白銀 三枚	白銀 五七枚	
計 六月二七日	寺社奉行所より檢分につ き 小檢使 小頭 同心 小使	一人 一人 二人 二人 不明 四人	金 三〇〇疋 二〇〇疋 一〇〇疋 一〇〇疋 一〇〇疋	金 三〇〇疋 二〇〇疋 二〇〇疋 七〇〇疋	
八月二九日	上野東叡山に挨拶の爲 献上 凌雲院大僧正 執當(圓覺院・楞伽院) (觀明院・安禪院) 御院代 坊官衆	一人 二人 二人 二人 三人	銀 五枚 一枚 三枚ヅツ 一枚ヅツ 金 三〇〇疋 二〇〇疋	銀 五枚 一疋 六枚 二枚 金 六〇〇疋 六〇〇疋 六〇〇疋	

[illegible]





計	九月一三日	燈明寺より引移り 御先拂い山同心	四人	南鐙一片ヅツ	南鐙 四片	御先拂いは如來着座・ 開扉・開帳・還座の折 にもある。
計	九月一四日	燈明寺引移り世話の謝 禮 町同心（南） 〃（北） 供 諏訪町名主	二人 二人 八人 一人 十三人	金 二〇〇疋ヅツ 〃 二朱ヅツ 一〇〇疋	四〇〇疋 四〇〇疋 一六朱（二兩） 一〇〇疋	
同日	九月一五日	結願出仕につき 上野衆中 住心院權僧正	一六人 一人 一七人	白銀 二枚ヅツ 〃 三枚	白銀 三二枚 三枚 白銀 三五枚	
九月一五日	閉帳後上野護國院へ滯 在につき 釋迦堂 〃 修覆料として			金 二〇〇疋 白銀 一〇枚 金 二〇兩	金 二〇〇疋 白銀 一〇枚 金 二〇兩	

計											
</											

人（うち中通り即ち僧侶二十八人・下部百四十三人）とあり、日光門主から人足（百六人、馬二十五疋の人馬を下されているが、人足百六人及び辨當持・雨具持等にて計百二十人となつた）に錢百文・馬子え二百文づつ支給している。

食費は平常のものは〔同 二〕には一人一日一匁五分の割で焚出しをまかなわせているが、特別の場合には人数も多く品數もふえる。又時には酒肴も饗するので總額は相當嵩んだ事であらう。

一、田原町臺屋佐兵衛招呼開帳中焚出シ其方へ申付候間、先年之通一日一人前一匁五分宛ニ而随分出精仕相勤可申旨申渡ス  
〔享和三・四・二〕

東叡山衆法事後於座敷二汁五菜料理蒸菓子出之（略）下部之ものへは少々料理略之、人数都合百三拾人程なり

〔同 六・一〕

營繕費としては假小屋普請が尤も高額出費で〔同 二〕の場合は四月一日、九十三兩で落札し、傳法院の棟梁鈴木筑後という者にうけ負わせている。

一、吉村富右衛門入來中野治兵衛申入候は假小屋普請も入札いたし九拾三兩之方之落申候大工は當院出入の鈴木筑後江申付候、猶又貴公様方部屋之儀は院内に而割付候旨咄しいたし 云々  
〔大本願役人〕

その假設の内容は〔享和御願下〕二年十月二日付社奉行所宛の書留により御印文口・靈寶場・諸御影所・奉加所等が建てられ、眞田家番所等も設置された事がわかる。即ち

#### 差上申一札之事

信州善光寺本堂爲修復來亥六月朔日より日數六十日之間淺草寺於客殿如來開帳仕度旨奉願候處當七月廿七日御内

寄合於御列席願之通り 御免被成下難有奉存候依之開帳中

客殿前ニ三間梁ニ七間之建出シ左右ニ九尺三間之庇を掛前ニ貳間ニ拾間之綴を附中陣下陣ニ仕 九尺貳間之御印  
文口并建出シより南之方ニ六尺貳間之小庇北之方ニ九尺三間之廊下附貳間梁ニ拾間之角屋を立靈寶場并諸御影所  
ニ仕表門内ニ貳間梁ニ三間之奉加所六尺四方之番所四ヶ所 六尺四方之手水場拾ヶ所 何れ茂板葺假小屋仕度朱  
引繪圖之通奉願候処願之通御免被成下難有奉存候 勿論開帳相濟次第假小屋等取拂御届可申上候爲後證 仍而如  
件

淺草寺別當代

惠門院印

享和二戌年十月二日

信州善光寺

大勸進

眞覺院權僧正印

寺社

御奉行所

これらの施設は毎回ほぼ同様に行われたようであるが文政度回向院<sup>(14)</sup>における假小屋は今少し大規模である。

知札建立について安永・享和兩度は谷中の大工長兵衛という者に大札六・中札二・小札六の計十四枚を極上節なし樅板・杉柱にて柱根は抜きし出來るよう箱をふせて作るよう申しつけ、見積り大札一枚銀三十五匁、中札同二十四匁・小札十九匁となつた事が〔享和御願下〕二年八月三日の條に見える。右の費用は計十四枚で三百七十二匁である。しかも實際の建立に當つては〔同〕二年八月六日雷神門前及び矢大臣門前に各大札をたてた折、立合いの代官下役人（一人）に青銅三十疋、片付のため淺草表・裏門番（各一人）に二十疋づつを禮金として與えて居り、同八

月二十日大札四・中札二・小札六（上野黒門前・兩國・湯嶋・日本橋・永代橋・千住口・護國寺門前・芝高繩・四ッ谷口・糒町・青山口・廣小路）の十二ヶ所に立て百疋は仁朱・五十疋・三十疋などそれぞれ適宜に謝禮（いわば手數料）を出している。又被服費も法服ばかりではなく數量も多いので金額の記載はないが決して少額ではなかつたと思われる。新調された衣料品目は〔安永七岸本〕及び同年〔奥日記〕に最も詳細に記されている。<sup>(15)</sup>

かような斷片的資料によつては江戸開帳の収支の實態を明確に把握し得ないのが遺憾である。ただ諸種の文書類の敘述から概觀すると六度のうち前三回は収納も多かつたが、後半漸次低調となつた事が推測せられる。中でも最初の江戸開帳は非常な評判で老若群集し死傷者もあり、餘りの混雜のため八月五日まで開張の豫定であつたのを五日間短縮して閉帳をはやめた事が〔如來三都廻國〕に記録されている。

一・開帳始め之時方々立候札ニも六月五日より八月五日迄と書候得共、最早群集いやましに成行人死まよひ子盜喧嘩盛になる程に、公儀江内證ニ申上候而七月晦日乃暮六ツに閉帳しけり（元禄五・七・三一）

この時及び元禄七年の三都開帳においては約二萬兩の収入を得たと言われており早速本堂の再建に着手している。しかし元禄十三年七月二十一日出火にあい折角集荷していた所の用材が烏有に歸した。新たに大勸進別當に任せられた慶運は前回の募財の實情を検討し、責任者山崎藤兵衛等不正を行い私腹をこやしていた者を罷免し、一切の運営を組織だて、眞田家と協定して収納金も嚴重に管理せしめやがて寶永四年・二萬四千餘兩を費した現本營が完成したのである。

元文度も參詣は多數群集したが、反面各種の出費もあつて豫想通りの収益ではなかつたらしい。しかし充分とは言えないまでも欠損にはならず、一應伽藍修復を行ない得た事が〔如來三都廻國〕に記録されている元文・安永兩

度の寺社奉行所宛願書によつて知られる

(略) 御當地開帳仕候所參詣致群集勸化物も相應ニ打集候得共存候程には無御座候 其上遠國之儀道中并支度萬端物入多相殘候勸化物ニ而は大当也申殊更及大破修復成就難仕難儀至極奉存候 依之來酉年於京都大坂六十日宛開帳仕本堂修復成就仕度奉願上候 云々 (元文五・七)

(略) 本堂爲修復三十八年以前元文五申年本所於回向院開帳仕其助力を以本堂修復相加箔ス (勘) 屋根其外及大破此節修復自力ニ難斗 云々 (安永六・七)

安永度は最初の間雨天つづきで七月に入つてからは暑氣がつよく朝夕は參詣人も多いが日中は殆んどなく、修復の費用にはむつかしく思われた。故に〔奥日記〕安永七年七月七日には大勸進役人から大本願側に對し次の申入れがなされている。

一、今井忠藏吉村富右衛門江申聞候は御開帳追日御繁昌ニは候得共兩替先年と大違ひニ而金子毎度納り不申候 其上此度銅屋称(勘)にも仕度候 彼是ニ付廿日之日延奉願度奉存候 右之趣上人様御承知御座候ハ、近々上野へも相伺可申候 此段被仰上被下度院家被申候 云々 (安永七・七・七)

即ちこの頃貨幣價值にも變動のあつた事が類推される。かくして七月十四日には來ル間七月三日閉帳の豫定であつたのを二十三日迄と願出で、二十日間の開帳延期を得て漸く欠損にはならなかつたらしく、翌八年五月には本堂内瑠璃櫃を修覆し、善光等御三卿の像を新調した。しかしなお如來堂修復の費用には不充分であるため、京大坂並びに日本廻國開帳を企て九年四月より行つてゐる。

更に享和・文政兩度は收納が少く、閉帳を二十日間延期したが諸雜費にも足りず却つて借財さえも負う状態であ

つた。その原因として「享和今井用記三」「文政三奥日記」等には惡天候・酷暑・惡疫流行等をあげてある。

當年開帳之儀は世間一統麻疹流行其上場所柄か參詣薄く不繁昌之儀ハ世評の通ニて散物納め方甚少く入用にも中々引足不申候 云々（享和三・九・一〇）

（略）然所最初之間打續雨天此節は暑氣強ク御座候故朝夕開閉之節群集致候迄ニ而晝之内は參詣茂薄ク御座候得は修復等之助成ニも難相成雜費にも如何御座候半哉と倒惑至極難仕候 依之來ル八月朔日る同二十一迄日數二十

日之間開帳日延之儀奉願上候 云々（文政三・七・七）

然し斯様な理由は表面的なものであつて、實は各地に百姓一揆が瀕發して居り經濟的不安定の時代であるので、漸次幕末にかけての封建制度が行きづまり、社會全般に動搖のきざしを反映しているとも見る事が出來よう。

それにもかかわらず初期の江戸開帳が一度成功して善光寺一ヶの伽藍修補の費用を満たしたのみでなく、それに關與したもの（例えば開帳場として借用した寺院の經濟）にも潤おす所が大きかつた故であらうか享和度には傳法院から、文政度には回向院から各々進んで開帳場に提供する事を働きかけている。

「享和二御願上」によると五月十二日付で明年の善光寺開帳には淺草寺傳法院を借用したい旨願ひ出た。同二十日奉行所から淺草寺客殿は御門主御成りの折り御膳所となるのであつて差支える故、他の場所に變更してはどうかと申付けられ、その後七月二十一日に至り同所での開帳許可が下つている。この傳法院はもと支院三十四ヶ寺を有した淺草寺の總本坊で、日光門主の兼帶所であるが延享三年風雷神門の坊舎からの出火で焼失し、寛政元（一七八九）年本堂修營・同七年雷門が再建されているが、猶經營はこの當時も相當に困難であつたらしい。諸所の修理も出來かね借財もあり、御門主の日常の食事さえ儉約していられる程であるから善光寺に場所を提供し、その開帳が

成功すれば同寺にも相應の費用が入るであらうからと働きかけ、その許可を得たものであつた。〔同〕六月四日の條に次の如くある。

一、淺草寺は御本場御持ニ候得共一鉢手廣之寺院ニ御座候得ば思召通御修復も行届兼如何ニ思召候 尤去春中難捨置分數ヶ所御手入有之候得共客殿并書院向杯相殘御手入無之候然處 此度開帳之儀相調候得ば善光寺ハ相應ニ修復も相加候様ニも相成候付御本坊御物入も無御座修復も出来 善光寺ニ而も他宗之寺院借受開 仕候ハ雜費も甚薄く有之候由 旁願方相含淺草寺客殿ニ而開帳仕度段相願候儀御座候

一、兼々御内々申上候通御本坊御勝手向積年之御不足段々相當甚大之御借物能成必至與御難澁付三ヶ年以前ハ嚴敷御食儉被仰付 御門主御方ニも御召物御調菜迄も被爲減御艱難之御凌拙僧共も恐入罷在候（中略）、此度開帳淺草寺ニ而有之候様御成候ハ、觀音堂は勿論其外諸營社迄も收納方例年與違格別之御爲ニも罷成可申 左候ハ、無據御借物一方宛も相減御勝手向一助ニ罷成御門主御方御内外御安堵可被成哉ニ思召 御自由ケ間敷候得共彼は含ニ而此度開帳之儀願上候事ニ御座候付 右之段拙僧共ハ具御内々申上淺草寺ニ而開帳之儀相調候様何分爲頼入候間何分善光寺願之通 被仰出候様被成度思召候依之 此段御内々申上候 以上

六 月

圓 覺 院  
住 心 院

右之趣は極内々の儀ニ付日記等に寫置候儀無用之旨圓覺院被仰候由ニ候得は段々御執當中様之御苦勞ニ罷成候趣書留置度内々寫置候之

又回向院は明曆三年大火の折十萬八千餘人の死者を埋葬した無縁塚を發端とし、幕府の庇護のもとに形態を整の



えた淨土宗寺院で、天明以後定期的に勸進相模の興行があるなど庶民と親しみの深い寺院であり、善光寺の出開帳は元禄五・元文五・安永七年とすでに三回行われていた。然して文政度も前年の正月善光寺から信受院・上田丹下兩人が出府して出願等諸準備が行われはじめた所、早速回向院からも役僧龍海を使者として、先年來の御由緒もある事として、明年の出開帳には是非當院を使用せられたい旨申し出でている。<sup>(17)</sup> それには「拙寺面目のため」使用されたく、經濟面での心配は不要であると言っているが、前記の狀態からしても文面通りにはうけとれず多少とも財政面に期待する所があつたのであろう。

次に江戸開帳の運営についてであるが管理の具體的方法は〔享和今井用記一〕において人選決定のあつた一月三日、供奉の人々に申渡された「覺」並びに「定」<sup>(18)</sup>によつて知る事が出来る。すべて秩序を守り夜間の外出を許さず、喧嘩口論せぬように行動をつつし、一紙半錢たりとも疎略にならぬよう示されて居る。又金錢の出納は兩寺役人立合いのもとになされ不正の行われる餘地のないよう嚴格に管理されていたことが用記等によつて見られる。なお〔同一〕二月十二日には勘定方及び小奉行方に對して十數項目の勤向「大鉢覺」が出されて居り、その概要は次の通りである。

一、開帳中の奉納散物等は中野治兵衛・勘定方三人・及び大本願役人の立合いで記帳し法成院に渡し、上田丹下立合いで納戸えおさめる。また本堂、諸御影所の敬物等に不正がないが常に中野治兵衛・勘定方三人が見廻る。<sup>(別当役僧)</sup>

一、開帳中の諸拂・佛餉米請拂等は治兵衛のさしづの下に勘定方が行う。

一、支拂いの場合に入用次第法成院より受取つて支拂う。餘分にうけ出してはいけない。

一、供奉の僧俗共に金錢を一時貸出したり、入用を勝手に立替えたりしてはいけない。

一、初尾料・御膳料・月牌等も皆記帳する。

一、本堂并諸尊御影所散物はたまり次第取集め、夫々に紙札をつけ會所え持参しておく。諸散錢箱は日々閉後錠をあけ、同様に夫々紙札をつけ會所に持参する。それらは翌日錢座において大錢小錢をえりわけて四文錢はよみ立、小錢は呷に入れ、五貫文を通して秤にかけ、中野治兵衛門及び大本願役人立合いの上封印し、日々帳面に左の如く記入すること

一、錢何百何貫文

諸散物并諸御影料

一、錢何百何貫文

御印文散物

一、金何程

日月牌料

一、銀何程

奉納初尾御膳料

一、錢座において錢調の節は勘定方一人（勘定方<sup>他</sup>多用の時は小奉行一人）宛始終ついていて見分する。

一、兩替屋に散物を渡す時は中野治兵衛の差圖をうけ勘定方立合いで渡す。兩替屋から金子を納める場合も同様のこと。なお散物渡し帳面並に金子請取帳面はきつと印形を取っておく事

一、諸買物は値段等吟味の上買入れる、諸支拂は別紙御定書の通り心得て受取りをとつておく事

その他臨時の事柄は中野治兵衛に相談の上取計らうこと

以上が開帳中の心得であるが、如來往復の道中でも日々収入があつたので散物等は「同一」に次の如く定められている。

一、道中日々奉納散物等之儀は衆僧並勘定方立合改之帳面ニ記シ老僧印形を以、上田丹下方へ請取納戸江可相納事

但シ開帳中之外は御休御坂山御道中所々御逗留共可爲同前事（享和三・二・五）

また各宿々から寄進の人馬の事についても丁寧にくわしく記帳し印形をして永く本堂に納めおくよう規定されている。兩替は享和度にははじめ金子善四郎というものにさせる可く交渉していた。（同二）

一、

神田永井町

金子 善 四 郎

右之者當時上野御出入ニも罷成猶亦先年善光寺江も金子貳百兩奉納被致候 旁因縁を以開帳中諸散物兩替相願候ニ付今日申付候之（享和三・五・一〇）

しかしこの者は参拾貳文のひらきでは損失多い故百文のひらきにしてほしいと申立て、その上不埒の儀があつたので先に差出してあつた引請書を戻し、七月七日からは淺草駒形町の内田甚三郎にさせる事となつた（同三）。

一、右兩替之儀淺草駒形町内田甚三郎江申付候之

錢拾貫之積り一込<sup>（喰カ）</sup>

掛目七貫五百五拾目

但シ金壹匁ニ付諸掛り参拾貳文

相場 時之相場

會所る觸出シ仲ヶ間取引相場

一、右之通ニ而引請證文勘定方迄差出候ニ付昨日より錢相渡候也（享和三・七・八）

以上の如く當時の金銀銅三種の通貨のうち日々の収入は銅錢による小額の収入が最も多くこれを金に兩替して記録

し、支出を差引いた純益金を以つて本寺の修覆等の費用としたのであるが、その場合寺役人や僧侶個人が直接現金に手をふれる事は出来ず、松代藩眞田家の管轄下におかれていたのは注意すべきことと思う。

e、眞田家との關係

權門諸家の中で眞田家と格別密接な關係があつた事はしばしば述べた所であるがそれについて今少し検討を加えておきたいと思う。地理的條件からしても善光寺が眞田家の行政範圍内にあつた事は當然であるが、出開帳の場合にも兩者は常に協調し合い互恵關係にあつた。

まず開帳が内定すると信州本寺では早速松代藩え使者を派遣して豫定をつたえ、期間中假番所之人數を詰めさせられたい旨及び出府道中の便宜を取はからわれたい旨依頼している。即ち享和度の例をとると「享和二御願」にて開帳内定（享和二・三・一二）期日を決定し東叡山の御聞濟を得（同五・三）同右の件寺社奉行より許可された旨（同七・二九）一々報告し、享和三年に入り「享和今井用記一」一月十二日・二十四日・四月十一日・十二日・十七日等に松代の職方月番白川寛藏まで開帳中御番所御建人數差出される件は先例通りにしてほしい。但し御預け金はその時の實情により先例通りには行かないかもしれない事等交渉し、また道橋奉行役所に對して如來出府の折領分内の丹波嶋、矢代兩渡船場で船貳艘用意されたい旨及び道中宿々で前例通り寄進人馬をうけられるよう口添えを願いたい旨申し入れている。然して享和三年五月五日出府の折には松代の普請懸り役人衆四人・人足貳百人が出役しているが、これはその前日から市村渡船場附近にはげしい出水があつた爲整備に多くの人員を要したのであり「享和今井用記一」・平時であれば「如來三都廻國」元祿七年五月廿七日に「又舟渡ニハ眞田伊豆守殿ヨリ侍二頭アシカル五拾人 船頭三十五人五ソウニテワタシ奉ル 云々」とあることなどからして百人前後であつたと考えられる。

江戸においては開帳準備のため出張している善光寺役人が（享和三・四・一二以降度々）眞田家江戸屋敷留守役人と連絡をとりつつ、着府の道中警固、開帳中の番所常詰人数などを依頼している。この時の開帳場における眞田家番所は表に三ツ道具・幕鏑・手桶・臺提灯などをおいた極く手狭なものであるが毎日小頭一人・同心五人・下部一人づつ詰め、食事は眞田家のもちであつた。なお如來出府に際しては板橋宿少憩の折眞田家からは小頭一人を使者として赤飯二荷がおくられ、同宿より傳法院までの行列警固のため足輕二十人・小頭二人が差向けられている。その内譯は御輿脇四人・御手廻り二人・跡箱二人・御輿四人・龜二荷・惣供一人・掉（享和三・五・一八）となつてゐる。

江戸滞在中には開關の前日（五・晦日）その知らせをかねて着府の挨拶に大勸進別當自身出向くのが例であり、尤も享和度は別當が持病のため代僧を差出し、又折々物品を贈答し、日延べ許可、閉帳前後等にはその都度使者を以つて報告している。開帳中には藩主（八・八）・奥方（六・十八）・隠居等各々参詣し、閉帳後には南部坂の眞田家屋敷へ招待している（九・五）。これらの場合には種々の金品の施入があり、如來招待に當つて七拾餘人の者が出されて往復の道筋を警固したのは勿論であるが、惣閉帳の後開帳場を引拂つて他寺へ移り、或いは信州飯國の折の行列にも出府の時と同様の人数が差出され、藩内宿驛の便宜をとり計られる例であつた。

かような協力に對し善光寺側としては前述の如く開帳中眞田家よりの印鑑を持参した者には特別に内陣通り参拝を許し（五・二八）、閉帳後は収益を同家に預け入れて、支出の監督をうけたのである。これを「お預け金」というが〔同一〕では四月拾一日から數度にわたつて交渉が重ねられている。四月拾七日には先頃眞田家より開帳中に奉納物などあつた時は届出るよう申し越されたが、當方で國元と相談の結果その件については時節柄の事として目立

つような奉納のあつた場合は寺社奉行所並びに上野表え届出るのであるとして眞田家には一應ことわつてゐる。御預け金についてはこれとは別に次の如き書簡の往復がなされている。

(略) 先年、散物少キ由御咄有之候由兼而致承知候得共、去年中大御用被相勤莫大之物入有之大分不如意之勝手向ニ候へハ甚此節俵物被相用萬端格外之質素被申付候得共、如來開帳ニ付而ハ萬事先年之通御頼之儀(大本願、大勧進)其御兩寺、御申越被相伺前例之通取斗候様被申付候事ニ付乍厄介御興着日警固外開帳中番人等迄此方ニ而ハ先年之通差出入候事乍賄等も此方ニ而申渡差置候儀ニ付、其御方御取扱も何れ先例之通御取斗有之候様致し度候、先達而治兵衛殿に申達候通御願り金之儀先年、相増御預有之候様致度旨及御談置候右之御心得ニ而御取斗頼入存候、右等之趣宜申達旨役人共申付候間此段得御意候 以上

七月十四日

菅沼九左衛門

今井磯右衛門様

これに對し善光寺側からは、同日御紙面の趣は承知しているが何分にも

(略) 此度は散物至而少く此様子ニ而ハ諸入用之半分ニも引足不申甚致倒惑候、併當春中御國元ニおいて白川寛藏殿江及御面談候節萬事安永年中成澤勘右衛門殿江御懸合之上御互差出候口上覺書之通此度も取斗可申旨得貴意候儀ニ御座候得は何れ先年之口上書之通及御面談御事ニ御座候 云々 (享和三・七・一四)

右の返書を出している。更に八月二十日には先頃は参詣も少い由であつたが此の頃では多くなつたからとして

(略) 先日中、参詣も多此程別而夥敷有之由散物御預り之儀私共御懸合不取斗之様子も相成致迷惑候間何れ先年之振合ニ不相替候様散物御預有之候様致度存候 此段得御意置候 以上

八月廿日

菅沼九左衛門

今井磯右衛門様

と申入れがあつたが一向まとまらず、このような事をくり返しているうちに販國されてしまい萬一松代表で懸合う事にでもなつてはお互いに不行届きとなり迷惑である。此方から何程とは申しにくい故、其方から何れ御發言あるものと存じ待つていた、しかし未だ何も連絡なく、やがて御出立になるのであるからそれ以前に何とか埒明けたいと言ひ、

(略) 前々之通一箱御預り表向ニ而内五百兩當時御差引残り五百兩先例之通永く御預り申度御座候、外ニ勘辨取斗方も無御座候ニ付前斷之趣私共存寄無腹臆及御相談候 云々 (同八・二九)

と提案された。善光寺側ではいかに請求されてもこの度は不況であつて御預けする餘裕はない。先にとりかわした安永度の口上書には「開帳收納金修覆にも當置候金有之候ハバ御預ケ可申」としてあるが、今回のように實際の入用にも足りず却つて借金した程であれば何とも致し方もない。しかしそれでは餘り氣の毒故「何となく金百兩お預け」しよう、若し不承知ならばつきり御斷りすると申出で、

(略) 僧正被申候ハ勸物金ハ入用ニも引足不申候間御預之儀は御斷申候外無之候 併御屋敷之御厄介ニ相成御人數等被差出被下其上御入用も掛り候義何共氣之毒ニ被存候 右申候通勸物金ハ無之候得共何となく金百兩御預ケ可申候段御内々御咄申候様僧正申付越候 右之趣御不承知ニも御座候ハ、此上ハ無據表向一向ニ御斷申候外無之旨致内咄候 云々 (享和三・八・晦)

右の趣は九月十日にも重ねて申入れているが眞田家としては「表向壹箱之積リニ而當金五百兩御預之儀」を要求し

てゆずらず、一向に折り合いがつかないので結局國元に飯山の上松代表役人中と掛合う事となつた。

享和度は斯様に不況のため未解決におわつてゐるが、本來はここにもしばし論ぜられてゐる如く江戸で千兩纏めて眞田家に預け入れ飯國したようである。然して「御預け金掛合」の安永七年三月三日の條に

一、右勅物彌御預り被成候節ハ此度も御渡方之儀御領分妻科村入作並三輪村御年貢を以爲替ニ御渡被下候様仕度候と善光寺役人から眞田家に申入れの記録があるのでその支拂い方法が判る。その支拂い額は前掲用記の八月二十九日の條と照合して預け入れの半額五百兩相當のものであり、あとの半額は「永く御預け」という名目で眞田家の収入と見做され、即ち兩者で壹箱を折半したものと考えられる。

### 三、開帳記録より見た善光寺の組織

#### a、近世の寺院機構

一光三尊の阿彌陀如來を奉祀する如來堂即ち「大御堂」を中心とし、多數の山内諸院坊即ち「小御堂」が集つて成立している所の善光寺は、往古から永い傳統をもつた「中衆」十五坊（淨土宗・現存は十四坊）が主體となつて如來えの奉仕を繼承して來た。この中衆は當山開基善光の譜代末裔なりと稱する妻帯僧で越年行事の執行をはじめ各種の權限をもつて居り、「妻戸」と稱する五坊（中近世は時宗・現在は天臺宗）と共に本坊大本願の下に一つの善光寺念佛集團を形成して來た。又これらと相對的に見られるのが大勸進を本坊とする「衆徒」二十院（天臺宗）の一群である。このうち妻戸は貞享二年以降天臺宗に改められたので現在では山内を總稱して兩寺中と呼んでゐるが、且つては三寺中と稱したのである。又元來はその性格職掌を表わしてゐたと思われる本願・勸進の呼稱が各々



獨立した寺號として公文書等に用いられるようになったのは慶長<sup>(19)</sup>の頃からである。元來一宗一派に偏することなくすべての僧俗に親しまれて來た「無本寺」<sup>(20)</sup>の善光寺に二本坊即ち淨土天臺兩宗の對立する風潮を醸成せしめたのは徳川幕府の政策によると考えられる。寛文四年から元祿十六年までの長期にわたり將軍綱吉・家宣を補して幕政を擔任していた松平吉保は大本願智善上人の父であるが東叡山出身の慶運僧正とも俗縁を結び、大勸進別當に任ぜられた慶運を通じて兩寺を懷柔しつつたぐみに分裂をはかつたようであり、善光寺を日光門支配下におさめ、一方においては松代の眞田家をして善光寺を督せしめた。

江戸時代中期頃までの善光寺は一應一カ寺として經營されて居り、表面的には兩本坊の關係も平隱で寺務一切は兩寺の役人が大勸進内の「御役所」において行つてゐる。故にある意味では兩寺の關係は現狀よりも一層協力的且つ緊密であつたと言える。寺務内容は當寺は無檀であるから師檀關係の仕事はなかつたが、寺院經營・領地の管理・住民の訴訟問題などを統制していた。寺領は元和以降長野・箱清水・七瀬・三輪村の一部（正保二年平柴村と交換）の四カ村千石を領有し、重要な財源となつてゐた。

近世善光寺の寺役人の組織は代官と稱する柄澤・中野・清水（以上大本願）、高橋・今井・久保田（以上大勸進）その他數家が各々世襲的に本坊の寺務をとりあつたが、如來堂の經營に當つてゐる。彼らは武士階級と同様の格式・權限を有し「寺侍」とも言う。中でも高橋氏の如きは中世戸隠及び善光寺を一手に支配していた俗別當の栗田氏にかわり、近世初頭から善光寺を經營したがその權力を利用して領民に苛斂誅求し、高利貸・油商・農業等を兼業して私財を増殖し、領民の反對にあつて延寶年間追放せられた。又今井氏は上高田村出身で數代にわたり代官をつとめ、同心三・四人を常備し屋敷内の白洲において領内の簡単な訴訟を裁決（特に重大な事件は松代藩に依頼）した

ので、相當大きな權力・財力をもつていた。又出開帳の場合にはこの役人が役僧と共に善光寺を代表する地位にあらつたのである。

寺侍と同様の寺務を行うものに被官がある。これは一種の名譽職で町人の中の有力者がえらばれ、各自の職業のかたわら盆などの重要な行事の折善光寺に出勤し、又出開帳の時にも隨行する。例えば〔亨和今井用記一〕

御被官

一、

熊井喜重郎

岩下源右衛門

右御茶之間江被召出此度江戸御開帳ニ付被召連候間乍太儀可相勤候 役ハ勘定方被仰付候 尤小奉行之方多用之節は相樂助合候様ニとの御事ニ候旨御院代上田丹下今井磯右衛門中野治兵衛着座ニて申渡之〔亨和三・一・一五〕彼らは苗字帯力を許され武士待遇をうけるのであり、松代藩えの使者役をもつとめた。これを被官又は大被官と稱し大體世襲的で兩寺に各十人宛あり、やや軽い仕事に當るものを小被官と稱した。

當時の善光寺はいわば封建領主であり、寺侍の下に町年寄↓庄屋↓組頭があり更に一般領民が所屬していた。寺領は總括して兩御門前・八町・三力村<sup>(21)</sup>というが、實際は十三町（庄屋の居る町數が八町）で、これに大本願所屬の立町と大勸進に所屬する横澤町のいわゆる兩御門前をいれた十五町の人口は初期にはごく僅かであつたが江戸末期には約八千人と言われる。町年寄は三人乃至四人が定員で一人宛月番として勤務し、寺と領民との連絡を行い、宗門改帳の點檢・土地家屋賣買の監督・領民間の紛争の仲裁等の役で、一定の俸給はないが不動産の移動訴訟事件の世話などによる料金をうけた。又出開帳や伽藍修覆の折の人足招集も町年寄を通じて行われた〔同一〕。

町年寄

谷 九郎 左衛門

一、 右相招御供人足之儀申達之 左之通

一、 御供所長持一棹 定貳人

一、 御寶物長持四棹 定八人

一、 輿 長持三棹 定六人

一、 供 長持一棹 定貳人

一、 双盤 定貳人

一、 賽錢箱 四棹 定八人

一、 善光卿御輿 定六人

一、 常灯明 定貳人

一、 常香 定貳人

一、 御本尊御鳳輦 定八人

一、 御印文御鳳輦 定四人

一、 五拾人

右當五月如來御發興ニ付御送之人足五拾人八町並三カ村江可申付候 尤諸尊方御輿其外之持物等夫々江繼人足差添候得共、病人亦是子供同様之用立不申ものを不差出様可被申付御開帳之儀は道中宿々ニ而茂人馬御寄進致し候

善光寺の江戸開帳について

程之事ニ候得ば人々如來之御爲を存知御寄進同様ニ相心得可差出候

一、江戸御着之日は下宿被仰付賄茂被下候 其翌日より二日逗留之宿賃並販國道中路用旁與して臺人ニ錢貳貫文宛

先例之通被下之候間 其段も能々申含メ置候様庄屋共江可被申達候

一、若黨宰領並家中供其外高之者等は此方にて召抱都合定人足九拾七人之と九郎左衛門江咄申聞候

一、御販國御道中は日數相隔り候事ニ付御迎え人足共ニ其御手宛有之候事ニ候 是は追而可及沙汰旨九郎左衛門江

申聞之(亨和三・四・四)

庄屋は計十三人あり<sup>(21)</sup>肝煎・名主などとも呼ばれ財力ある家の者が世襲的に行い、戸籍事務・水帳・職業調査・借家の監督・自身番の管理等に當つた。出開帳の折は近在の宿驛まで行列に加わつて送迎し、期間中には御見舞いとして代表の者が出府し兩寺え各々奉伺している。例えば亨和度大本願方之は〔奥日記〕

一、信州町年寄

谷九郎左衛門

藤井茂右衛門

中澤與左衛門

右三人御開帳中御伺として彦太夫殿江書狀を以氷さとふ一箱献上

一、信州八町三カ村庄屋中 右同斷ニ付岩茸一箱持参 御不例ニ付御目見無之(亨和三・七・九)

同様に大勸進方之出向いた事は〔亨和今井用記三〕に見える。

一、岩茸一箱

善光寺

町在庄屋

右爲御伺惣庄屋代ニ箱清水村重左衛門出府御目見被付候也（亨和三・七・八）

一般領民は寺に對して各種の勞力奉仕をする義務がありこれを「屋敷役」と云う。出開帳の行列供奉に多數の人足を徵集し得たのもそれ故であるが、大體は各自の職能により奉仕したので鍛冶役・木挽役・御疊役・大工役・桶屋役・紺屋役・檜物役・小竹役などあり、大門町はじめ善光寺宿關係の町に住むものが傳馬役・歩行役等宿驛人馬を提供していた。なお善光寺家來といわれるものに先の大被官・小被官をはじめ、刀被官（仲間・足輕等）・御山見役・御書役・男女役（雜役人夫）・十日役などの役があり享保年間頃までは實際の勞力奉仕であつた。但し近世來には被官以外は殆んど役錢で納入したようである。

#### b、兩寺の關係

出開帳においては山内各寺院が密接な關係を保ち一體となつて行うのが本來のあり方である。まづ出開帳を行うべき意向が別當から御役所に伝えられると大體の期日及び出先きを大勸進役人が中心となつて原案を立て、大本願役人を通し上人の同意を得た後實際の準備にとりかかる。直ちに松代藩えその内意を伝え、役僧役人が出府して東叡山・寺社奉行・町奉行等之願書を提出するがそれには何れの場合も三寺中の連署で本願上人の印形が必要であつた。なお安永度までは

信州善光寺寺中惣代

寶 勝 院

信州善光寺

大 本 願

## 信州善光寺

## 大 勸 進

と寺名のみ記していたが享和度からは大勸進が權僧正と記入する事としたので大本願も上人と記す事になった。<sup>(22)</sup> 願書提出のため右各所に出頭する時は兩寺の役人及び寺中惣代（一山を代表する僧侶）が同道し、殊に寺社奉行所へは大勸進別當もさし支えない限りは同行した。しかし大本願上人は自ら出頭された例はなく必要な場合には役僧宗光寺を派遣せられる。<sup>(23)</sup> 上人方は出身門地の關係もあり、代々將軍家奥向と親交があるので開帳に關しても文通により何彼と便宜を計らわれている事が奥日記により知られる。享和度の場合も前年寺社奉行所よりの開帳許可が出る<sup>(24)</sup> と早速（享和二・八・二三）御本丸老女方宛に明年六月朔日から六十日間の江戸開帳の件を申入れ、また上人は三年目毎に登城「御目見えの儀」あるのが近世の例であつて、たま／＼享和三年はその年に當つて居り、五月二十日公方様・御臺様・峯姫様・菊千代様・老女以下、及び西ノ丸大納言様・御老女以下に各御目見えしていられる。故に一層頻繁に奥向きと書簡の往復があり、その都度開帳についての申入れもなされ、如來出立・着府・開闢前日及び翌日・日のべ許可・閉帳・飯國出立等すべて上人から報告旁々挨拶狀又は物品が届けられた。又開帳中御參詣を依頼し、老女方と日をうち合せて上人も出仕され、控え席で十念を授與され或いは種々取りもちにつとめられた例もしば／＼ある。

如來の出府は百數十人の大行列で大勸進別當も加わるが、大本願上人は女性の事として道中には加わられなかつた。  
〔如來三都延國〕

大本願上人は女儀の事ニ候へば回國いたさず信州にて伊豆守様御家來中に御相談本堂普請可致旨 戒善院慶雲に

相談之上 上人儀は信州江龍販り候（元祿一五・一・六）

行列出立に際しては上人信州在寺の場合は門前まで送迎されるが、不在の折は本坊役人が挨拶に出向いて近郷まで奉送迎して居る〔享和今井用記一〕。

一、本願上人御方被官先年之通丹波鳴橋宿迄爲御見送罷越候由也（享和三・五・七）

また開帳中出仕の要員は大本願系の山内住侶・役人からも多數選ばれ行列中に加わつて居るが、道中宿驛では一應如來を拜し本陣えも到着の挨拶の後各自の宿舎に引きとるのである。開帳場における控所も兩寺は各別の室につめて居り、日々の奉養収納その他重要な事柄には必らず大本双役人も立ち合い協同管理していた。

上人は元文頃以後殆んど江戸青山善光寺に常住されたので江戸到着及び下向に際して板橋宿と江戸宿寺との間を本供揃いで行列に加わり送迎し、板橋宿で如來に焼香禮拜し、別當とも挨拶面談された。また開關・結願兩日に出仕されるのは勿論であるが、その間幾度か（安永度十回・享和度五回・文政度六回）参詣別當とも對面され、或いは相互に「お見まい」と稱して度々物品を贈答し合つた。

斯様に兩本坊は常に連絡を保ちつつ事を行つてゐるが、詳細に検討すると善光寺における天臺宗の力が漸次増大しつつあり、大本願に對して大勸進側からしばしば諸般の事に介入がなされている。ことに經濟面の實務を執つていた大勸進はとかく大本願を無視する事が多かつた。即ち〔寺史研究〕所収及び大本願藏の文書類を見ると元祿九年七月及び十二月には「東叡山了簡書」<sup>(24)</sup>が出され

一、奉加金之事大切之金子ニ候間本願江示合諸事不埒無之様可仕旨兼々大勸進江申聞候、然所彼是不埒之由不届ニ候乍此上勘定之儀本願江相談之上逐吟味勘定相立候様可仕其上ニモ不埒異隔之儀於有之者其節何分ニモ可有沙汰

## 事

## 一、中衆御堂諸役不相替如古例之本願支配之事 云々

その他が規定された。しかしその後も經理面は不明瞭で本堂再建後もなお經費不足なりと申立て、享保十五年に到つて本堂修覆のためと稱し再び江戸開帳を計畫し、公儀え提出の願書に大本願の連署を求めて來たが、實際的には單獨で行う事を企てた爲大本願から異議があつて實現には至らなかつた。翌十七年及び元文四年等に上人から公儀え提出された訴狀を見ると、且つて元祿年間に行われた三都開帳以降の幕財に關しても大勸進ことに玉照院昌榮と係役人山崎藏兵衛が種々不都合な行爲をなして決算を明らかにせず、また御影を改めたり佛具等の調進も獨斷でするなど専横をつづけていた事が知られる。しかも大本願側の主張は一向とり上げられず元文五年二月にはついに日光門主支配下たるべき旨の「被仰渡書」<sup>(25)</sup>が發せられた。大本願からは直ちに「乍恐口上書奉上候」<sup>(26)</sup>として永らく淨土宗に屬していたのであるから増上寺支配下におかれないと願ひ出たが許されず、折返し同年四月上野執當圓覺院・龍王院から「大本願へ申渡覺」<sup>(27)</sup>並びに寛保二年には海竟王院・大覺王院よりの「被仰渡書」<sup>(28)</sup>が出され宗旨・法要・地方勸化・住持繼目・年頭禮等全く日光門主の支配下に屬することとなつた。

かような經緯の間に行われた江戸開帳は表面的には兩寺一體で事に處してはいるものの相互に多少のわだかまりがあつたのは止むを得ない。例えば〔御城入り先例〕においても元祿五年・元文五年・安永七年の各々御城入りの交渉があるが、大奥へは上人は伺候し得るが大勸進別當は御廣舗までしか參入出來ず御錠口内で比丘尼兩人え如來御印文等を渡さねばならなかつた。故に奥向まで伺候し得る護國院(寛永寺の別當)を便宜上大勸進別當の名代という形にして參入する事を願ひ、上人が佛龕や御印文を扱われぬよう警戒している。例えば〔同〕元文五年七月朔



日寺社奉行牧野越中守宛差出しの覺えは次の通りである。

一、四十九年以前元祿五申年於回向院開帳相濟八月五日本尊阿彌陀如來、釋迦之尊像御印文等三ノ御丸江御入其節之大勸進本孝御供仕桂昌院様御拜禮被爲遊御印文茂御頂戴可被遊旨被仰出候得共 大勸進並寺中之外手放シ候儀難相成由申上候得ば本孝ハ御目見も不仕候間御印文御授與相成間敷由ニ付 當座之爲御了簡護國寺を暫本孝弟子ニいたし御印文相渡候様ニ被仰付候本孝掛申候五條袈裟を護國寺掛候而本孝爲名代御頂戴被爲相濟候 右之趣本孝書留置候

一、本尊御入之節本願ハ尼之事ニ而御座候故若不苦被爲思召 佛前江罷出候様ニ被仰付候而は差支之儀有之候間是又幾重にも御斷申上度候 云々

開帳場え大奥老女方參詣の折には、安永度は上人が挨拶應せられ亨和度もその豫定で御休息所を求めた所、大勸進側役人は適當な部屋を都合する事が出來ないと斷わり、或いは上人參詣の折信徒に對して「下に居れ」と申したのが悪いとか、十念を出されぬように等種々の掣肘を加えている。〔亨和今井用記二〕

一、此方門内ニ而上人様御參詣之節御十念御出被成候事決而難相成候間兼而左様御心得可被成旨申達彦太夫承知候也（亨和三・五・二九）

一、柄澤彦太夫法成院部屋江召呼申聞候は 先日朔日上人様御參詣之節此方門内ニ而玄關迄諸參詣人之者ニひかへる下ニ居れと御先徒衆被申候此義如何之思召ニ候哉貴様ハ被申付候哉 江戸表ニおいて下居キ候ハ相定居候通ニ而別而傳法院御門内ニ而上野表も不恐勝手次第下ニ居杯と申候事難得其意候 云々（亨和三・六・六）

また文政度は連日酷暑のため參詣も僅少で收納をはかるため日延べを願出たほどであるのに、六月十九日上人參詣

の日は

講中は不及申参詣之男女數百人江御十念御授與之事

とあるのをはじめ七月二日・十日・二十日・八月十日・十七日と數度の参詣にはいづれも群集多く、その反面上人参詣の豫定が急に變更になつた（六月十二日）時には折角参集した諸人が非常に落膽したことが奥日記に見える。

このような状態は却つて他方に反感をもたす結果ともなつたやうで「文政三奥下」にもその爲大論諍となつた記事がある。七月二十日上人参詣の折例の通り十八講の講中世話人約三十人が御休息所に取持ちに出、群集も多くなつた時、大勸進の法類で開帳中院代をかねて居る高麗寺が講中世話人本所石原町の火鉢屋儀八という者に向い

青山上人様被爲入候節講中之者共不殘上人様御取持申 開張場ハ一向御取持も不致義難心得候、畢竟上人之御参詣は開帳之妨ニて誠ニ上人ニは無之大惡人と申ものニ候

など雜言を申している所え神田三河町御伽羅講世話人杉山五兵が來かかつて口論となり、十八講が結束して高麗寺を相手に喧嘩となつた。上人販寺の時はさしひかえ例の通り橋向うまで御見送りしたがその後再び、平常は開帳場につめているが上人の参詣の日は特に銘々自分の賄で肩衣等もこしらえ御とりもちしている。もし上人の御取持ちする事が御開帳の妨げになるといふなら一同開帳場に常詰めする事を辭退する、とにかく院家（別當）の意見をききたいから面會したいと申出で大口論となつた。その後大本願役人の仲介で高麗寺が失言をあやまり、二十八日に至り暫く同人と講中とが和解の一席を設けて落着している。いづれにしても善光寺信仰を全國的なものとし、序々に確實にすべての階層の人々の生活感情の中に浸透せしめたものは念佛の行と、それをすすめられた上人の功績と言ふべきであらう。

江戸以外の出開帳については上人が直接關與することはなかったが三都開帳にはいづれも大本願側役人が立ち合う原則であつた。然るに寛政六々十年西日本一帯を巡錫した回國開帳の折、每春京又は大阪の宿寺で（計四回）大勸進が單獨で開帳した爲大本願側から抗議を申し入れた事が〔如來三都廻國〕に見られる。これに對して大勸進側は

（略）右兩所（京都龍雲寺・大坂法妙寺）にて開帳之儀ハ隔年越年場所開帳之儀ニ候得ハ京大坂開帳とも難申御立合ニも及申間敷存候如來巡國之儀は依信心願出候場所迄御廻開帳之儀ニ御座候得は開帳場所は此方ニ而極メ難キ儀ニ御座候 乍去後年御巡國之節ハ京大坂江被參候ハ、前度ニ御相談及可申候 此段及御挨拶候様ニ院家被申付候（寛政一〇・七・五）

と今回の越年をかねたもので京開帳、大坂開帳などという程ではないから申入れなかつたが、今後は前以つて連絡する旨約束している。それにもかかわらず天保度（これは許可は得たが地元の反對にあい中止した）回國開帳を企畫した時にも、そのついでに京・大坂開帳を行おうとして居り、大本願側は元祿以来の三都開帳に立ち合つた例をあげて回國は一手に行われても京・大坂での開帳には當方も立ち合う可きであると申入れ、大勸進側は京大坂と雖も巡國同様であるから單獨で行うと主張してゆづらなかつた経緯が〔同〕天保六年二月の條に記されている。

なお最後の江戸開帳となつた〔文政今井用記乾〕の記録では開帳双書提出のため上人の印形を持参されたい旨大勸進役人から申入られたが、大本願側は言を左右にして中々応ぜずついに東叡山内楞伽院の僧正が間に立つて取りなし十二日後に漸く調印し得た例がある。

一、（略）此度之願書印形斗り之事ニも有之間敷何か含事有之様子ニ相聞へ候間自分内々執當衆江申上其上之了簡

ニ可致間 云々(文政二閏四・四)

一、八ツ半時楞伽院僧正様被爲入本覺院丹下被召出被仰候は 昨日龍王院迄罷越此間中之儀云々相咄候處先例之義彼是伺相立候得は中々急ニは下知も出来かたく 左候へば先づ開帳相止右一件落着之上開帳願ニ相成可申候ハ、甚差支ニ相成候間大事之前之小事ニ候間 此度ハ先ツ願書披見印形爲致候方可然旨被仰候 云々(同 五)

「何か含事有之様子」 「先例之義彼是伺相立候」などという表現は兩寺間に低迷していた従前からの軋轢を暗示しているようである。且つて享保十六年にも開帳願を出し許可を得ながら兩寺間の争いのため中止になった例もあり、この時もそのような事態に至るのを案じて仲裁がなされたものと考えられる。

c、講 中

開帳に當つては諸般の雜務に講中の助力を得る必要があり、その交渉は約一年も以前から行われた。例えば「亨和二御願」では

一、來年開帳之節能出取持與候様淺草臨時講并惣講中頼ミ可申哉否之儀先日岩井御氏江法成院承合候所 講頭兩人江善光寺より相頼可然候 其上此方よりも可申達候旨直記殿被仰聞候ニ付今井磯右衛門今日淺草惠門院御方江罷越猶又御相談申上候處岩井御氏被申候通御頼被成候方可然候、尤名前ハ左之通ニ而此兩人江御頼被成候得ハ惣講中江不殘是ル申聞候由惠門院様御申被成候之

北八丁堀かやば町裏ノ河岸

嶋 地 太郎兵衛

淺草駒形堂際

齊 藤 傳 兵 衛

右兩所江今井磯右衛門龍越來ル亥年開帳之節ハ御取持頼入候總御講中頭江可相廻候處御兩所江御頼申置候様淺草御殿御役人中被申候ニ付 乍略儀御銘々江ハ不申入候旨取繕申入候處入御念候段返答之 尤嶋地太郎兵衛ハ留守

ニ付番頭江能々申置候之（亨和二・八・一七）

右は淺草寺觀音講中に協力をもとめたものであつて、三年五月假小屋普請等の準備の出來かかる頃から「淺草講中頭分」のもの追々近付ニ入來之（亨和三・五・一四）とあり、同十三日には正式に依頼している。〔同〕

一、淺草臨時講會所に齊藤傳兵衛同道ニ而中野治兵衛龍越十三講頭分廿六人傳兵衛引合ニ而近付相成開帳中宜御申合御世話頼入候趣申入候處皆々承知之旨也

六月十日には右淺草講中頭分の三十四人に開帳中の取持ちを頼み「十三講之内一講ニ取持札三枚宛渡之」ということで酒肴・蕎麦・食事を供している彼らは主として靈寶場の世話に當り善光寺講中は本堂をうけもち各々諸用に當つたのである。〔亨和今井用記二〕

一、開帳場取持之儀堂番衆江及相談靈寶場之方淺草講中取持所本堂向善光寺講中與相定メ候之（亨和三・六・二五）また開帳中ばかりでなく如來着府及び歸國の折板には橋宿まで送迎の行列に加わり、あるいは開帳後他所之移動の折も供奉して種々協力している。その人數は不明であるが〔同〕には

一、淺草觀音講中十三組頭立江今日御逢御酒素麵被下候之 人數百三十人程（同・二三）

とあり、同年八月二十四日には開帳中の勞を謝して約百八十人に酒肴を饗<sup>29</sup>していることから相當多勢所屬していた事が推測される。

文政度は五月朔日から（知札建立前の方がよいとの事で）念佛講中の世話人等に取りもちの件を依頼している。

この時は前回淺草講中えも依頼したが餘りに繁雜であつた爲善光寺念佛講中のみで行つてゐる〔文政今井用記坤〕  
 一、丹下儀今日念佛講中世話人福井町近江屋小兵衛并湯嶋六丁目房州屋安右衛門方へ罷越開帳以之義昨日蒙 御免  
 候ニ付講中に爲知之義如何致哉立札前ニ爲知之方可然與存候、近日之内房州屋と相談いたし被呉候様ニ致度旨小  
 兵衛へ申入候所承知仕候 云々（文政二・五・一）

房州屋安右衛門

近江屋小兵衛

右入來ニ付講中世話人名前等相調伺ニモ立札前ニ爲知之方可然被存候 私共兩人ニ而當八日頃より銘々相廻り可  
 申旨申呉候之 其節申談候ニハ此度ハ念佛講中斗リニ而取持致し被下度候 亨和度ハ淺草講中交り候故彼是混雜  
 之義有之甚迷惑いたし候 尚又立札等も相濟候上講中世話人迄簾酒進上申度候（中略）就れ私共兩人迄御まかせ  
 可被成候旨深切ニ申呉候之（同・二）

六月二十三日には多田樂師東江寺で酒肴を饗しているがその時招かれた善光寺念佛講中の世話は

駒込

四人 染井

二人

王子

一人 入谷村

二人

谷中

三人 淺草三軒町

四人

本所石原

八人 御花講中

三人

本所四ツ目家主

二人 本郷新町屋

三人

湯島切通

二人 神田相生町

一人

明神下横町	一人	湯島六丁目	一人
三組所	一人	本郷二丁目	一人
佐倉町	一人	花房町	一人
明神下澤ノ井向	一人	車坂代地	一人
金澤町	一人	三河町	一人
日本橋品川町	一人	小網町二丁目	三人
同 一丁目	一人	同 三丁目	一人
久松町	一人	小傳馬町三丁目新道	一人
深川	五人	淨心寺門前	一人
繩打場	一人	小川町	一人
仲町	二人	鮫ヶ橋	二人
四ッ谷新宿	二人	塩町	二人
芝伊皿子	一人	桜田町	一人
三十軒堀四丁目	二人	木挽町五丁目	一人
銀座三丁目	一人	京橋鈴木町	三人
神田堅大工町	一人	同 黒門町	一人
同 松田町	一人	御疊講	

とあり計四十五講・世話人八十一人である。右の御疊講については信州櫻小路佐嶋屋幸助というものが下世話人として出府した記事があるので地元の講中であつた事が知られる。なおこれらは地域的な區別であつて中には御ろうそく講・お花講・五種講・御伽羅講その他奉仕するものの名稱を冠した講や女人講などと重複するものもあり実際には三十組であつたらしい。毎日六十人宛交替で各々役割を定めて奉仕した事が具體的に〔奥日記〕に記されている。

一、麻布講中世話人櫻田町島屋久之丞今日青山へ罷出候、同人申聞候趣ハ先八日多田藥師東江寺ニ而惣講中世話人寄合有之候趣は江戸中ニ而善光寺講三十組有之候所、一組ニ而二人宛致日勤候而一日ニ六十人宛御開帳場ニ罷出御取持申萬端御世話可致旨取究ニ御座候、扱又當十七日御着之節は講中不殘麻上下ニ而板橋宿迄御出迎之積り之由右之趣ニ御座候間此方様ニ而も早々講中世話人之方江島領助様御廻り被下候様致度候旨申聞候 云々（文政三

・五・一一）

#### 四、善光寺信仰の普及

既述の如く出開帳は初期においては相當の收入を得たが後期には收入面の成果は餘り得られなかつた。その理由としては雨天続き、酷暑、疫病流行等をあげているが實情は時代が下るに従つて廣く人々に靈佛を拜させるといふ出開帳本來の意義が稀薄となり、開帳願書を見ても初期のものには「繪縁起講談つかまつりたく云々」と幾分でも布教結縁の意圖がうかがわれるが、〔亨和二御願〕における添簡願書の如きは

信州善光寺本堂其外爲修復來ル辰年六月朔日る日數六十日之間於本所回向院本堂本尊阿彌陀如來開帳奉願度 云々



(亨和二・四・晦)

と文面上には勸募の目的のみが強く出て居り、却つて信徒の淨財喜捨の心を離反せしめる結果をまねいたのではなからうか。その他開帳後半期が幕府の儉約政策<sup>(9)</sup>と時を同うしたことも不振の一因となつたと言えよう。

このような現象はひとり善光寺のみならず江戸中期以降各地に流行した諸寺の出開帳にもほぼ同様の傾向がみられる。所謂江戸文學といわれる諸書にも出開帳の信仰一圖の純度が減退し、演出過剩となつて心ある人々の響きをかたつ事實を無視することは出来ない。例えば〔嬉遊笑覧〕第七

寛政の末品川海晏寺開帳ありて山上なる銀杏の大木を心として桐油合羽にて大佛の像を造りて觀せ物とす、芝全交・合羽大佛略縁起を作り。棒腹すべきものなり。其後回向院に鎗をもて白澤など出來しかどはやらず。文政二年二月攝津國天王寺に九丈六尺の釋尊涅槃の像を竹籠にて作れる、殊の外流行せり(中略)江戸にて開帳あるに何時にても參詣群聚するは善光寺の彌陀と、清涼寺の釋迦佛、また成田の不動などなり。

更に中には〔下手談義<sup>(9)</sup>〕に記されているような惡質なものもあり各種の弊害を派生している。善光寺開帳には他

寺ほどの墮落はなかつたがのぼりを立て鳴りものをうちならし、次第に華美興行化して行く一般の開帳風俗に全く無關心ではいられなかつたであらう。〔亨和今井用記二〕には三年五月二十三日淺草寺境内の商人中から表門外左

右に立てられるよう河内木綿の幟(長二丈一尺、巾二尺一寸五分)二本が奉納され、中村座、市村座などからは同六月二十日大提灯(長七尺、巾二尺、雨覆丈ヶ一丈一尺、横四尺)一對の寄進をうけて居り〔同〕、上野執當などからも注意をうけている。

一、楞伽院江法成院罷越御逢被成書付ヲ以仰渡候、左之通

善光寺如來江戶着之節信心之輩出迎等大勢不能出様其筋々江致手分け而堅相斷可申、尤御旗幟等双而目立候様之儀は不相成事ニ候間是又堅相斷路次穩便ニいたし横行ケ間敷義無之様善光寺役僧へ急度可申渡旨於阿部播摩守殿被仰渡候（亨和三・五・一四）

一、昨日楞伽院様へ被仰渡候書付一々寫外ニ目立候儀等決而無之様連中江御通達頼入候旨相認、法成院名前にて念佛講中御花講中等江使ニ而遣之（同・一五）

一、幟双盤先日る目立儀無之様嚴敷被仰渡候ニ付蕨宿る相止ル（同・一七）

即ち東叡山を通じて如來の着府の時大勢出迎之旗幟など目立つ事のないよう奉行所から申付けられ、大いに自肅して蕨宿からは鳴り物、のぼり等をやめて江戸入りしたのである。寺社方からは右の他度々警告が發せられているが、すでに亨和頃には餘り派手に宣傳しなくとも一應參詣群集があるほど善光寺開帳は著名になつていた。（同）

（略）此節寺社役被申候は寄進物等全ク一々不相叶と申事ニは無之候、提灯鎚錢等も餘り大造に而は難相成、提灯も寄進有之候はば數を減し、つなぎ錢も少々宛ハ随分不可苦候、乍然外々之開帳は奉納物或ハ造物等ニ而參詣人を引寄候邊も有之候得共 善光寺開帳はたとへ何も無之候共如來尊壹ツニ而随分參詣群集可致候由、種々如來之難有不思議成様被申候也（亨和三・五・二五）

もつとも既述の如くこの時人々に拜せしめるのが本佛でなく開帳佛であり、あわせて數種の靈佛寶物を展示し、御印文護符等の配布・屋根板・灯明料その他寄進受納など雜信仰的形態において多數人士をひきつけた點で批判がないわけではない。ことに儒者・國學者・神道家達は佛教界の腐敗墮落を難する一因として當時諸所で行われた低俗・營利的な勸進奉加の幣を糾弾して居り、國學者戸田茂睡<sup>(32)</sup>の梨本書には最初の善光寺江戸開帳（元祿五年於回向院）

の事を三人の對話體文章により次の如く痛烈に皮肉つてある。

無縁寺にて信濃善光寺の如來の開帳とて老若男女おびただ敷參詣ときく、善光寺の如來は御利益そのまま生佛なれば、あまりたつとく、直におがみ奉らば惡心のあるものは御罰もあたるべし又穢不淨の者の見奉らば佛をけがし申になると秘佛としたるなるべし（中略）無縁寺の門迄きたれば、門の上そのわきの屏のうえに男どもひしとならびて居たり、是はあまり人込にて何も見られざるゆえ、ここにのぼりてみるや、不行儀な事かなと思えば大声をあげ、年よられたる衆、女中衆、子どもしゆは如來様の御まへまでは人込にて中々よりつかるる事にてなし、開帳とききて是まで折角參詣のかひもなし、せめてこころざし初尾ばかりはうけとりて御なんどへおさめよ、如來様はまことの御いきほとけ、天眼天耳をもつて誰があげたるといふ事はそのまま御存知なさるる也、御契約のしるしにここにてわたされよ、初尾さへあげらるればおがみ申たるも同前なるとて請取、さて蓮池のむかひ、辨財天のうちには、此度の靈寶第一ゑんま大王のかいんあり、此金印をうくるが金一分づつなり（中略）左の方をみれば南向になかく小屋をかけ、つくえのうへに硯と帳を置、それに一人づつの筆取、すきもなくならびいて、是が御堂の奉加帳所なり、佛前のはしら一本が金百廿七兩づつ也。むな木が金子なんりよう、けたがいく兩、いた、くぎ、かはらまでそれ／＼直段きはまり、御心ざし次第、帳面に書しるし、如來様の御目にかくるる事也云々と、江戸時代は町人文化全盛の時代と言われ、物質面では高度な發展が見られるが、一般民衆の精神面の自覺は未だ低く信仰は著るしく俗流化し迷信化したものであり、時には娛樂をかねている場合もあつた。善光寺が四度にわたつて開帳場に借用した回向院は天明以後定期的に境内で勸進相撲が行われた事で有名であるが、その他にも種々の興行があり、文政度の「奥日記」の中にも

一、上田丹下於奉納所ニ申聞候ハ開帳中當院於境内ニ見せ物等無賃ニ而致見物候義御双方共ニ停止之旨下部迄も可申渡被存候、畢竟回向院々地面借り請候見せ物ニ候得は見物致度候ハ、銘々見料差出候而見物可致義ニ御座候云々(文政三・六・三)

とある事から、開帳期間中に同寺内で「見せ物」があり相提携して人氣を集め参詣人達は一日をゆつくり楽しむ事が出来たと考えられる。

また當時の諸佛菩薩に對する一般の信仰態度は淺薄でただ所願成就、病氣平癒等の祈願の對象(偶像)として崇敬するのみであつた。開帳場における説教が民衆への眞の教化・精神指導よりむしろ寺院の故事來歴をおもしろおかしく語りきかせるものであり、佛菩薩の奇蹟靈現をありがたく説くため様々の由來縁起が構成されたのもそのような風潮を反映しているのである。善光寺開帳で行われた「繪縁起講談」も同様の性格をもち、すでに扶桑略記(一〇九三頃)の頃から行われていた一光三尊佛の三國傳來說話の他に、如來と人とのさまざまな交流物語<sup>(33)</sup>を生じ、報償や契約など人間相互間同様の交渉の形が案出され、現世利益を強調する傾向が著るしくなつた。

出開帳の都度毎回奉持せられたものは「享和御願上」によると次の通りである。

一、本佛前立 一光三尊阿彌陀如來

一、開帳本尊 一光三尊阿彌陀如來

一、釋迦涅槃像

一、聖德太子之像

一、善光之像

一、善佐之像

一、善佐  
母之像

一、如來御印文

一、如來常灯明

一、如來繪縁起

これらには各々由來・利現等に關する傳説が付加されている。釋迦涅槃之像は現在山内の塔頭世尊院に奉祀される國寶の像である。圓融天皇天延參年越後國中頸城郡古多濱において漁師の綱にかかり引上げられ、信濃に送り奉るべしとの佛告により善光寺に祀つたと傳えられている。今もこの像の上つた所を善光寺濱と稱し、十念寺があり昭和十四年火災で焼失するまで大本願に對して末寺の禮をとつていた。出開帳の折配布されたものと思われる〔信濃善光寺略縁起〕には次の如く結縁をすすめている。

釋尊は此れ過去の佛へ、本尊生身の彌陀如來ハ今現在説法と説せ玉へばこれ現在の佛なり、この二尊に皈依し奉れば未來の佛と教へ玉へば善光等ハ俗體を改ためず即ち未來の佛之（略）今に至るまで此尊回國巡行の先興とせし事は釋迦彌陀長者以難二分離故に又三世の佛の次第を表し奉る所謂なり、しかあれば貴賤老若等しく結縁すべきものなり

次に聖德太子像を奉持する所以は、太子の佛教史上の業績の偉大な爲に早くから太子を觀世音菩薩の化身なりとする信仰があつて、善光寺の彌陀信仰と共に太子を結ぶさまじい信仰説話、例えば聖德太子と善光寺如來とが再三御書をおくり、偈を贈答し合われたという傳説などが派生していた。出開帳に奉持する像は、治承年間善光寺炎上の後、觀揚坊が造立したものであるとの縁起を有し、山内淨願坊の本尊であつて、同坊を一名太子堂又は御影堂と

も稱している。更に類推するならば一遍上人參詣の時以來當寺に入つた時宗が融通念佛の影響をうけて居り、彼らの尊崇する聖徳太子像が山内に祀られていた所以もうなづけるのである。<sup>34)</sup>

御印文は同略縁起を見ると孝徳天皇の時本多善光が佛前で念佛していた所に忽然と出現したものであると言う。

然して如來金口にてこれは觀世音の御作で佛徳をあらわす寶印なり、本來衆生の心中に具したるものであるが濟度の時至り今現前せしむ、この寶印を頂く輩は除災招福・現當二世安樂を得、三惡道の關をこえ淨土に入るための印である旨とかれた。これを頂戴して痼疾を治し、盲人目を明き婦人の安産した例もあるなど神秘的傳説を附している。これは牛玉寶印とも言ひ三箇あつて現在では正月行事の一環として、年頭の十五日間堂童子が奉持し、除災招福の靈力を加被する意味で信徒の頭上におしあてる儀がある。出開帳の場合も同様であつたろうが、それと共に「御印文御影、十萬」を用意したという記録もあるので紙に押印し一般に領布したと考えられる。

常灯明は現在も善光寺本堂如來前にある六角の灯籠三基の事で、くわしくは「善光寺如來放光常灯明」という。未だ如來を善光の私宅に安置してあつた頃、ある時油がつきて灯明が消えた所、佛白毫から光を放ち空中を照らされたので、この現瑞を末世の衆生のため永く残じ玉えと善光が願ひ、その光が灯火に點じた。爾來信心の輩上は將軍家より下諸人に至るまで常に油料を献じ不斷の光明となつてゐるとの傳説があり、これを拝し焼香結縁した人は三惡道におちず必得往生の御誓願があるとして略縁起には如來の偈が傳えられている。

斯様に近世善光寺信仰は、一見復合的でいかにも雜信仰のように思われるが、その底には念佛信仰の本流が絶え間なく生きていた事が見出される。恐らくこれら靈佛實物の拝觀は多數人士をひきつけ如來と結縁せしめる方便として演出されたのであり、念佛の行に導入する爲のものであつたと言えよう。

江戸中期以降の善光寺は歴代別當中最も積極的に活躍した本考及び慶雲が、東叡山配下の寺院から撰ばれて任ぜられた僧であつた關係もあつて、衆徒は勿論のこと中衆も妻戸もいわゆる三寺中すべて日光門主の權制下におかれていた。故に江戸開帳の例を見ても寺務運営・法式作定等何れも天臺宗側が中心となつて執行したのであり、開帳の開關・惣閉帳（結願）の法要にも東叡山學頭職慶雲院が導師をつとめ東叡山衆中多數が出仕している。例えば「安永七・岸本」の啓龜記録には

凌雲院様始十九院并龍禪院主追々御出之 云々

とあり、また「享和今井用記二」には

一、曉七ツ時上野衆中御來集一山總出執當手替其外山門在府之衆迄割付（略）

自我偈一卷斗其内戸帳を捲也

經呈而衆中御焼香退出座敷ニおいて御印文頂戴有之也（略）

開龜法則左之通

導師

凌雲院前大僧正徳考

啓龜供養之場・梵唄勝會ノ處・梵釋四王每降爲<sup>トニテ</sup>隨喜<sup>ヲ</sup>、神祇百靈必來爲<sup>ステ</sup>擁護<sup>ヲ</sup>、然則爲<sup>レハチ</sup>下倍<sup>シ</sup>増威光<sup>ヲ</sup>藩<sup>タラン</sup>中屏<sup>カ</sup>佛化<sup>ニ</sup>一切神分

般若心經

大般若心經

善光寺の江戸開帳について

## (略)

(享和三・六・一)

右が六回の江戸開帳中最も詳細な開龕の記録であり、他の場合もほぼ同様に行われたようである。これらを見ても何時しか善光寺の法儀が天臺宗一色に滔汰されていた事が知られる。しかし一般民衆にとつてそういう宗派の消長は關係のない事であり、法儀教學等殆んど問題ではなかつた。臺家僧侶が佛前で鎮護國家・天下泰平の祈願を行おうと、大衆は自己の現世利益を求め三國傳來の善光寺如來に所願成就を祈念し、かた／＼繪縁起講談に耳をかたむけ、娯樂をかねて開帳場のにぎわいに身を投じ、念佛の聲に同入和合して感激の一と時に没入する事をよこんだと思われる。即ち出府着寺の情況について「安永七奥日記」には

一、板橋宿の回向院迄途中以外群集、殊ニ蕨宿迄江戸の御迎参り板橋宿までハ町々々のぼり相持、老若男女幾萬人という事不知、城衆もたたさる御事御興御駕籠等も通り兼誰持候となく七ツ半時ニ回向院江御着、夫々上野僧衆持ニ而少シ法事有之 大勸進拜禮、其節中野治兵衛参り上人様御拜禮被遊様申來り候ニ付御出堂被遊候、此節中衆妻戸打續ニ而念佛有之 (安永七・五・二二)

同安永度開帳當日の記録にも次の如き注目すべき事が見られる。

一、夜前子ノ刻参詣群集門外ニ而大念佛誠。岩ヲたたみし如卵ノ上刻兩門開き候處大勢一度ニ懸入忽チ堂内外圪内爪もたたさる事大念佛。もわかり兼唯時の聲の如之 (同六・一)

文政度には板橋宿から開帳場 (回向院) までの行列に諸講中の人々が大念佛を申しながら御供している。〔文政三奥下〕

一、今日板橋宿迄爲御出迎如來御出立前迄ニ江戸講中世話人共は不及申下講之者迄大勢麻上下着用ニ而罷越其外思



ひくゝに幟を立大念佛ニ而御先供致し、且參詣之老若男女群集成事難著筆紙ニ義候事之、其上講中世話人を以御前江御十念相願數度御授與有之、御通行もはかとり不申候ゆへ回向院江之御着之義も遅刻に相成候事（文政三・五・一七）

制度上は東叡山の管轄をうけて居ても善光寺が庶民の寺である以上開帳場においても専ら行われたのは易行の念佛であり、善光寺念佛集團の中心たる大本願上人に對する皈依渴仰は非常なものであつた。故に上人が如來奉迎のため行列に加わられる時には、「安永七岸本」の例を見ても

板橋より本郷迄別而御通行難成程之御十念度々之、御先ハ筋違御門邊ニ而候半、御前漸伊豆倉方へ御立寄之所家内へ人入込大群集二階も下も男女之人斗ニ而町内向側共ニ通路不相成如何様之事出來候半と甚無心之候故則其段申上家内ニ而御十念御授直ニ御出立之云々（安永七・五・二一）

とあり、又開帳期間中に青山善光寺から參詣の場合にも夥しい群集で上人はしばしば行列を止め、道中各所で十念を授與していられる。「文政三奥日記下」の七月二日にも次の如くある。

一、御前今晚七ツ半時青山御出立五ツ半時回向院江被爲入候 例之通御十念度々御授與有之夫より本堂へ御參詣例之通り且不相替御本供ニ而被爲入候 御通行筋西之丸下より呉服橋へ御懸り品川町御通行此節同町半次郎宅前ニ而御十念同人宅迄講中世話人拾人程御出迎申夫より回向院迄致御先供候 傳馬町ニ而御十念通油町ニ而御十念御授與有之 其外所々ニ而御通行筋御十念御授ニ而致群集 右故御着も及遅刻候事（文政三・七・二）

上人參詣の折授與された御十念・御名號の數も相當多く前掲の如く冥加金も多額に上つている。恐らく名號やお血脈の下附を享ける事を如來の結縁とし、授與十念・大念佛など僧俗一體となつて共に唱和する所に人々は無上の

歡喜を見出していたのであらう。又御血脈は一般信徒ばかりでなく日光門主にも授與した例が〔享和二御願〕に見え、しかもそれが融通念佛血脈(35)であつたのは注目に値すること柄である。〔同〕

一、御前早朝東叡山に被爲入候 趣意は

御門主様融通念佛被爲受度旨御意ニ付今日御昇殿被成御血脈被差上候之〔享和二・六・二四〕

かくして善光寺信仰は階層の上下をとわず浸透して行き、或いは佛餉の奉納も單なる饌米や現金でなく〔享和今井用記二〕にも見られるように

一、松木八郎兵衛という人一粒一<sup>〇</sup>遍念佛餉袋貳袋差上候 先年も有之候事ニ付御前江懸御目 明朝之佛供ニ備へ候様申遣之〔享和三・七・二〕

一粉一遍念佛に信心のまことを献じ、或いは講頭蛇目屋仁右衛門の妻が大病の折には上人に「臨終正念の百萬遍」を願出で〔文政奥日記中〕

一、金百疋

蛇目屋仁右衛門

右同人女房大病ニ付 御前江臨終正念之百萬遍相願度由ニ而此方部屋迄致持参候間、使者を以青山へ差上候事

〔文政三・六・一二〕

個人又は各講中毎に大施餓鬼會を修行して居り、例えば文政度には七月十一日小網町講中、同十三日御疊講中、八月十八日御蠟燭講中が各々行つてゐる。

かくして近世末期には善光寺信仰即念佛信仰とも云える情態となつて居り、大本願上人はその頂點に位するいわば象徴的存在であつた。上人が開帳場へ参詣された折〔文政奥日記中〕の記事もその消息をよく傳えている。

(略) 今日も品川町筋御通行同所半次郎宅迄講  
 中御出迎申上是々御先供仕候、御通行筋々ニ而  
 御十念相願御授與有之候事凡貳ヶ所程之、誠ニ  
 正身の如來と申ハ青山之上人様ニ有之候様風聞  
 有之候 右故御通り筋々之群集成事往來も難相  
 成候程事 云々(文政三・八・二)

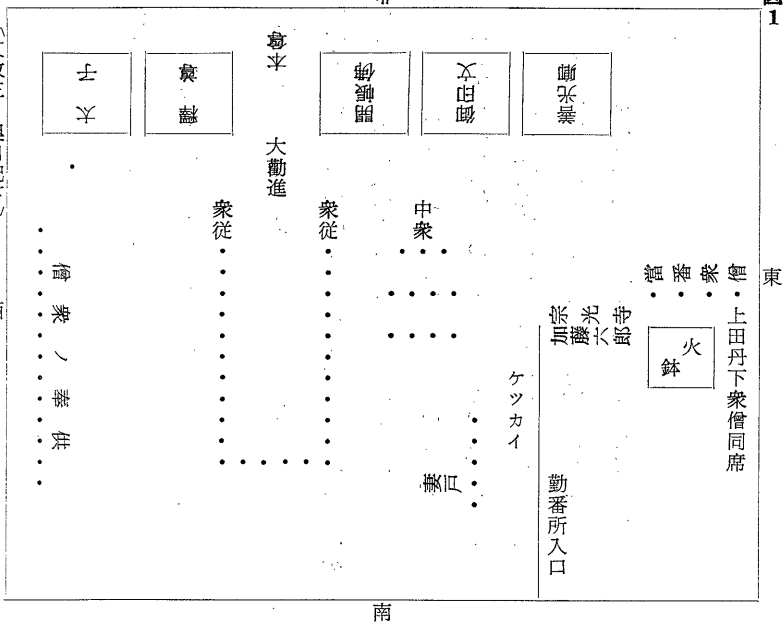
むすび

以上の考察によつて維新以前の善光寺は一光三  
 尊の阿彌陀如來を奉祀する本堂(大御堂)を二本  
 坊及び一山諸院坊(小御堂)が一體となつて護持  
 して來た事が知られる。出開帳の場合も同様で右  
 の三寺中が協力して行ない、實務運営は兩本坊の  
 在俗役人が責任を以つてことに當つたのである。

(圖一)  
 開帳場では前立本尊を拝せしめると共に「内陣  
 通り」と稱して涅槃釋迦・聖徳太子・善光三卿等  
 の尊像を一堂に安置し、繪縁起講談を行ない、日

善光寺の江戸開帳について

圖 1



〔文政三・奥日記下〕ヨリ

西

々の奉養・回向料の他に御印文を頂戴せしめ、御影・御血脈・略縁起などを頒布して冥加料を得るなど多角的演出によつて信徒を集め収入をはかつている。これは當時三國傳來の靈佛として善光寺如來と並び稱せられた京都嵯峨清涼寺の出開帳が本尊釋迦如來それ自體(36)を強調していたのと著るしく對象的である。しかも將軍家はじめ權門貴紳との交渉もありながら常に貴族化せず、零細な庶民を對象とし彼らの生活感情と巧みに融合し、種々の靈瑞や現世利益をとく「繪縁起講談」などによつて無智文盲の百姓町人の間にも深く廣く浸透して行つた所に善光寺信仰の特色があると言えよう。

經濟面を見ると既述の如く六回の江戸開帳のうち前半は盛況で一般信徒の參詣奉加も多く相當の収益を上げているが、後半三回は低調で出府開帳に當つては相當額の支出がある爲却つて借財さえ負つてゐる。それにもかかわらず善光寺が幕末から明治にかけての社會の變動期、ことに排佛毀釋の暴政にもよく耐えて明治中期から再び活況を呈するに至つたのは當時の住職誓圓尼公の功績であると共に、それ以前の長期に涉つて三都及び巡國開帳等により序々にきつき上げられて來た庶民信仰の聖地・信州善光寺に對する人々の皈依の底力によるものと言えよう。

又制度の上では徳川中期以降日光門主配下におかれ勸行等も台家の法式作定によつていたが、殆どの信徒は上人の十念授與に隨喜渴仰したので大勸進側も毎日の閉帳をはじめ隋時別當の授與十念によつて結縁につとめてゐる。その他如來出府の行列にも數多の講中が大念佛を申しつつ供奉するなど、易行の念佛を紐帶としてこの期出開帳が善光寺信仰の普及をうながした成果を忘れることは出来ない。

(1) 善光寺の朱印狀は(家傳)慶長六年七月廿七日の乃至安政二年九月十一日まで計十二通あり、大本願にもその写しがある。

(2) 資治通鑑卷二百四十唐紀五十六に

元和十三年十一月功德使上言、鳳翔法門寺塔有佛指(中略)相傳三十年一開、開則歲豐人安。來年應開。請迎之。十二月庚戌朔、上(憲宗)遣中使師僧衆迎之。十四年春、中使迎佛骨至京師。上留禁中三日、乃歷送諸寺。王公士民奉捨施、惟恐弗及。有竭產充施者、有然香臂頂供養者。

刑部侍郎韓愈上表切諫

(3) 「奥日記」延享三年に次の記事があるが、延享二年にはこれに關する具體的記事は見當らない。

御尋ニ付申上候覺

一、信州善光寺如來於本堂近キ頃開帳有之由何年以前何ノ年誰様御月番之節奉願致開帳候哉と御尋ニ御座候 本堂修覆去々子冬迄ニ出來仕右爲供養去丑三月十五日々四月十五日迄三十日之間開帳御座候東叡山江之御願も相濟候間開帳札二天門之前へ相立可申旨子極月中旬頃ニ大勸進方々申聞候 右之譯故御願等之義ハ此方ニ而一向不奉存候 以上

青山善光寺

延享三寅年七月

役人 深澤伊右衛門印

本多紀伊守様

同 丸山傳左衛門印

御役人中様

右の次は「奥日記」によれば寶曆十二年四月十五日から閏十五日まで行われた事が知られる。

一、信州善光寺念佛堂におひて三萬日回向有之本尊前立開帳ニ付今朝參堂 念佛堂江も參拜いたし候 右ニ付自坊ニても什寶

出之候(四月十五日)

(4) 「如來三都廻國」寺社奉行所あて願書

(略) 尤毎歲越年之場所々先例之通御印文は信州え差戻正月七日々十五日迄善光寺ニ而夫々頂戴爲仕右規式相濟中宿寺江差越次第同所出立仕候様仕度奉願候 右趣御座候故往來ニ都合宜行掛り之場所ニ而越年逗留仕度尤右巡行之間相願候箇所ニ而は五三日宛も逗留本尊拜爲仕候様仕度奉存候 且又雪國等は十一月中々正月中は通行難相成其外海上等日數難計儀ニ御座候故何ヶ

善光寺の江戸開帳について

年ニ而回國相濟候と申儀は難申候巡國懸り何方江越年仕候共逗留中は前々奉願上候通本山常式之朝開帳並施主開帳之儀式相勤申度奉願候 右申上候通巡行之次第且又京大坂三十日宛開帳並御當地參掛り越年逗留等之儀先格茂御座候間何卒御憐愍を以願之通被仰付被下候様仕度奉願候 以上

天保六未年四月

信州善光寺大勸進別當

寺社

圓覺院權僧上

御奉行所

(5) 「寺史研究」二二一頁にも収録

(6) 「同 右」二二四頁々

(7) 「如來三都回國」寛政十年七月五日の條

(8) 「享和二御願」享和二年五月十四日

(略) 其已來年々無懈怠修復相加候ニ付屋根其外見付は格別之大破ニも相見ヘ不申候得共本堂諸堂共屋根下柱等格朽損別而内陣向床下到而朽損強御座候、數多之伽藍ニ御座候得は此節修復之儀難及自力ニ難儀至極仕候 依之年限未滿ニハ御座候得共來亥年六月朔日より日數六十日之間淺草寺於客殿 前立本尊阿彌陀如來開帳仕度奉願候(享和二・五・一四)

(9) 「善光寺別當傳略」法印大僧都慈薰公の傳、(略) 九年庚子並得其請、二月公奉佛赴京師五月二日佛入於禁内、三日入於女院御所、遂到大坂巡化於東海道、翌天明元年辛丑到江戸駐佛干東江寺遂赴陸奥出羽、二年壬寅六月在越後十日町來迎寺公偶感疾以廿三日寂、秘哀不發從者奉佛歸、七月十日發哀 云々

(10) 「寺史研究」一九六頁所収

(11) 「善光寺深秘録」辻善之助「日本佛教史」卷八・一五七頁參照

(12) 大本願藏・「寺史研究」二六〇頁にも収録

(13) 「常憲院殿御實紀」卷四三・元祿一四・四・二五

桂昌院殿道灌山王子稻荷の社園勝寺のあたり追逼したまひ、また谷中感應寺にて信州善光寺の佛像を拜し給う、牧野備後守成貞護持院大僧正隆光も陪し率り(日記・寺傳・松蔭日記)(同) 卷四四・元祿一四・八・九

信濃國善光寺の佛像さきより谷中感應寺にて衆人に拜させけるをけふ三丸に迎へ給ふよて、かしこにわたらせられ御覽あり、

かくて又二丸にわたり給ひ、日光門跡公辨法親王饗せられ囃子あり、法親王に金紗十卷半、晒布百疋、蠟燭干挺遣はされ、僧網等みな時服を賜ふ（日記）

(14) 〔文政今井用記坤〕文政二・六・二五

本堂西の方に六尺ニ四間の御印文口 並に 三尺五間の小庇

本堂北の地面に三間ニ九間の小屋（僧俗役詰所）・三尺九間の庇・四間半ニ十二間の折廻し・六間ニ六間半の小屋

玄關・食座・台所・物置・仲間部屋 並に 九尺二十六間の廊下・六尺ニ二間の湯殿 六尺ニ二間の便所・西の方六尺四方の便所

居休屋裏の方三尺ニ九間の折廻し庇

六尺ニ二間の便所・三間ニ十四間の折廻し小屋

食座・竈屋・湯殿につづいて二間半ニ六間の小屋（僧俗詰所）

北の方三尺ニ六間の庇

位牌堂裏六尺四方の便所

本堂南の方三間四方の釋尊假屋

本縁起諸御影聖徳太子小屋・裏の方六尺二間の便所

本堂前六尺四方の焼香場二ヶ所

六尺四方の手水場八ヶ所

六尺四方の番所三ヶ所

裏の方二間半ニ四間の屋根板奉加所

六尺ニ二間の番所・以上何れも板ぶき

この時の費用は不明であるが同じ回向院における安永七年の假小屋は「金百五十二兩五匁にて淺草伊勢屋喜兵衛請合」となっている

(15) 安永七年四月三日 江戸にて

唐油合羽類―二匁 風呂敷―五十 火事装束―越後屋にて

善光寺の江戸開帳について

野袴（川越平・四反）―越後屋・大丸にて各二反づつ  
同 四月二十三日

江戸雇寫之者三十人前・看板（染色に万字の紋付―越後屋）

同 二十七日 信州にて

開帳用幕―四對 御納戸用幕―一對 本尊供奉寫の者看板―百十（陸尺看板・御手廻り看板・御箱持看板）

宰領羽織

同 二十九日

長持桐油（紙）―合羽屋長右衛門 遠治拾表地 郡内紋付―一反 羽織紐三掛 彌里絹切一衣・紐一掛

六月九日 本願役人衣服料金一兩三分ヅツ―二人へ 木綿合羽（侍へ）―二ツ 火事羽織―三ツ

〔16〕〔奥日記〕安永八・五・六（青山善光寺にて）

一、大勸進入來ニ付土産として二品被贈並隨身之者共つゝみの品給候（略）

右之節院家被申候趣左之通

此度信州善光寺善光彌生前善佐之像厨子いたし候付是迄有來候像之裝束日本様ニ而無之候老僧圓乘院江右之噂いたし候處圓乘院申候は御先住被仰候は當時之像は百濟國セイメイ王ソウサン王ノ裝束ニ而可有よし日本様之裝束之像は先年甲州善光寺信州江如來御歸座之時分右甲州ニ留り候よし申傳承置候様ニ被仰候と答候右之通ニ候得は彌此度三鉢之像新ニ割出來候厨子江移し尤是迄之檀上ニ安置致有來之像は右厨子之後江障子でも志つらひ其内江安置いたし候半と存候 此段上人へ御咄被申べく候 尤准后磯江何不苦敷趣ニ候は左様ニ致可申候 並先達而瑠璃檀修復ニ付本尊御厨子共ニ善光之檀江移置候 云々  
新調厨子は同年十月廿日「御遷座」の式にて如來を納めている。

〔17〕〔文政二奥記上〕文政二・一・二三

一、瀧水盃樽

本所回向院役僧  
龍海

右者此度善光寺如來御開帳御願として御役僧御役人御出府之由承り申候 右ニ付御内々御目ニ掛り度候旨申入  
（略）先年之御由緒も御座候間何分於拙寺於開帳被成下候様御願申上候 尤先年御開帳之御振合とは當時世間之様子も大きに替り候事故、先年通之御挨拶向などと思召も可有之候得共右之段は拙寺方如何様ニ而も不苦候 此段は御心配無御座 善光寺



如來襟於回向院御開帳有之と申事ニ相成候得は拙寺面目後々之爲ニも相成候事故 於拙寺御開帳之儀何分御願申上候、(中略) 丹下申入候者如仰此度開帳願出府いたし別當ニも場所之義は其本様へ感應寺淺草寺何れも先例有之事故 東叡山方楞伽院僧正 東漸院江及相談其上取極可申旨被申付候 云々(文政二・一・二三)

(18) 「享和今井用記」享和三・一・三

定

一、開帳中惣而佛前朝夕勤行等之儀萬事三寺中共ニ善光寺本堂之通可被相心得 其外開帳場所勤方之儀は三寺中無差別致和融事如來之御爲を存知面々實義を以大切ニ相勤可被申事

一、火之元之儀は別而大切之事ニ候間 面々心をかけ晝夜無油斷可被申付事

一、參詣之諸人江對シ疎略成挨拶等有之間鋪候 尤群集之中ニは御歷々茂可有之候間 失禮無之様可相愼事

一、開帳中萬端善光寺制禁之通可相守之 一分之爲として勸化ケ間敷儀堅可爲無用事

一、開帳場におゐて無益之雜談無作法之躰 無之義相愼可被申候 尤長髮可爲無用事

一、散物散錢等ハ信施物之事ニ候間 雖一紙半錢と不可致疎略事

一、開帳中他出堅無用ニ候 尤無據用事有之候ハ、役僧江申違許容之上罷出歸候節は早速其屆可有之候 夜中は用事有之候共

他出堅無用之事

一、朝夕共調菜之儀ハ上下無差別可爲一汁一菜事

一、上下惣而酒一切停止若隱密ニ相用候ものその紕におよばず信州江可差戻事

但シ無據貴客到來之節は可爲格別事

一、衆中は勿論召仕之者共ニ到迄口論或ハ異隔ケ間敷儀なと於有之輩は 不論是非早速信州江可差戻事

一、極暑之節ニ候得は病人も可有之候 其節ハ役僧役人江申達早速療治を加ヘ可申候 押而相動候儀可爲無用事

右之條々僧俗並末々ニ到迄急度可相守 若於犯違之輩有之は依其品可令沙汰候 以上

月 日

(19) 「寺史研究」一一八頁所収・甲府善光寺の永祿七年の棟札には

勸進沙門淨雲爲父妻 道空 道賀

善光寺の江戸開帳について

善光寺流浪沙門似形沙門心懺悔々々

遠州嚴水寺源瑜勤之

大本願鏡空永祿七年甲子七月十六日修之

と記されてあり「大本願」鏡空上人の名は見えるが「大勸進」は未だ寺號となつていない。兩寺號が併記されたのは慶長三年「御還座縁起」〔同〕一二九頁・同六年「御小割證文」〔同〕一七八頁所収が最い例である。

(20) 慶長頃善光寺は聖護院文書によると、同門跡の管領地であつたが宗派教義上の本末關係にあつたわけではなく、八宗兼學である。又各地の善光寺分身佛を奉祀する寺院（所謂「新善光寺」）とも特別な關係はなかった越後十念寺・大坂和光寺江戸青山善光寺の三所は大本願上人の兼帶所となつてゐる。本論文中にしばしば「本寺」という語を記してゐるが末寺に對する稱ではなく信州善光寺をさして便宜上用いたのみである。なお〔寺史研究〕一四頁參照

(21) 兩御門前横澤町・立町

八町大門町・後町・横町・北之門町・東町・西町〔阿彌陀院町・西之門町・天神宮町〕・岩石町・櫻小路（及び狐池町・上西之門町）

三ヶ村平柴村・七瀬村・箱清水村

(22) 〔享和二御願〕享和二・五・二

一、先例之通開帳願書ニ上人様御印形可ヒ成尤此方當寺ハ權僧正に昇進被致候事ニ付大勸進權僧正與願書ニ認候段申聞候處彦太夫申候ハ此方上人事一分ニ而公邊被願書等被差出候節は大本願上人と認來り候得共御連名之節ハ上人之文字無之候得共御官位御認被遊候ハ、此方も大本願上人と被遊被下候様仕度旨申候ニ付、磯右衛門申候は、被仰聞候趣御尤奉存候 此方ニ差支も無之候間大本願上人與被御名認可申之

(23) 遍照山阿彌陀院とも稱し長野村大本願領内にあり大本願役僧寺である。弘化四年大地震で焼失し今は廢寺となつてゐる。

(24) 〔寺史研究〕二三四頁所収・大本願藏もあり

(25) 〔同〕 〃 三二七 〃

(26) 〔同〕 〃 三二八 〃

(27) 〔同〕 〃 三一九 〃

(28) 〔同〕 三二〇 〃 なお〔享和御願〕の中に元文五年五月晦日、大勸進靈山院香嚴より寺社奉行牧野中守宛に差出された書付の覚えがある。即ち

覚

一、善光寺領千石 大勸進江納置千石

割符之御證文大勸進一人之宛ニ而被下置 寛永寶永御裁許狀ニ萬端表役可相勤之旨被仰出依之公儀 御觸之儀毎度眞田豊後守殿役人中々兩寺役人江被相渡右御請證文之儀いつても大勸進役人一判ニ而茂證文差上候儀は大勸進方一判ニ而本願と同判之證文差上候儀古來のみ今ニ到迄曾以無御座候

一、(略) 尤宗門改帳は不及申寺領一切之諸證文等不殘大勸進方ニ納置候

一、本堂修復は兩寺立合之儀ニ御座候故爲修復奉願候開帳之儀ニ御座候得ば兩寺連名ニ而奉願候得共 開帳勸化等は、大勸進役儀ニ而御座候故 始終開帳場ニ相詰寺中並役人等支配火之元等其外萬端猥々間敷儀無之様ニ申付候、本願方ハ役人差出置勸化物等納高ニ立合紛敷儀無之様ニ仕迄之儀ニ而御座候 云々(享和二・七・二七)

(29) 〔享和今井用記四〕 享和三・八・二四

一、淺草觀音惣講中十三組の講頭百三十八人餘其外開帳中深切ニ取持致し候人五十人程、都合百八十人程也、今日右之人々牡丹之間におゐて僧正御逢御挨拶有之法成院も罷出一禮申入 夫々並木巴屋におゐて吸物肴三種一汁五菜之料理出之儀右衛門罰出致挨拶候、御堂番衆兩人も參り取持被吳候也

(30) 吉宗の享保改革以後幕府は家康の治世に販る事を目的として勤儉尚武により窮乏した財政の立てなおしをはかった。享保、寛政、天保に行われた改革はいづれも大規模で常に綱紀の肅正、華美禁止・儉約・物産獎勵等の政策がとられているが十分な効果は上らず幕府諸藩一様に財政難となるのみで、他面農民層の反抗が激化するなど末期的症狀は救い難かつた〔享和今井用記二〕八月二十九日眞田家の書狀に別紙得御意候大勸進先年如來供奉御出之節御土産物有之候 兼而申達候通敷。御儉約中ニ御座候間右等之儀堅被及御斷候 此段得御意候 以上

〔同 四〕 九月五日眞田家へ如來招待の折にも(略) 扱又兼而御掛合申候通此節儉約中ニ付御龜末之段吳々斷有之

(31) 元祿寶永の頃までは開帳ごと手輕く仕掛けて入用すくなく近年の開帳は莊嚴つくろひ張番に對の看板染貫の羽織も昔は夢にだもみず、開帳場を仕廻ふと否や本尊を質に入れて入唐渡天の行がたしれず 云々

善光寺の江戸開帳について

(32) 元祿七年の著・〔日本佛教史〕第十卷二五〇頁所収

(33) 例えは善光が難波堀江で如來に呼びかけられ晝は善光が如來を背負い、夜は如來に背負われて信濃に歸宅した事。新堂を造り如來を遷座しても善光の小屋の白の上に再三もどられて「金殿玉樓なりとも念佛の聲なき所に我は住まず、我が名を稱へる人ある所こそ我が棲處なり」と告げられた事。善佐は一度死んで地獄におちたが、如來の光により皇極天皇と共に此土に蘇生し得た事。その他同様の意圖をもった傳説は枚舉に遑がない程多數ある。

(34) 五來重氏「一遍上人と融通念佛」(大谷學報第四十一卷・第一號) 參照

(35) 同 氏「伊勢三日月の「おんない」と直宗眞田派の大念佛」(高田學報第四八輯) 參照

(36) 塚本俊孝氏「嵯峨釋迦佛の江戸出開帳について」(佛教文化研究六・七號) 參照